鹿角市文化財調査資料78

特別史跡

大湯環状列石

発掘調査報告書(21)

2005. 3

秋田県鹿角市教育委員会

PL 1　大湯環状列石全景（平成14年）

PL 2　万座環状列石全景（平成11年当時）

序

大湯環状列石は、野中堂、万座環状列石を主体とする縄文時代の遺跡であり、その特異な形態、規模から昭和26年には国史跡、さらに31年には特別史跡に指定されております。

鹿角市は、市民の誇りでもある、この貴重な文化遺産を保存するとともに、整備、活用するため、昭和59年から環状列石周辺の発掘調査を継続してまいりました。

これらの調査結果を基に、平成10～14年度には、第Ⅰ期環境整備事業として、野中堂、万座環状列石周辺107000㎡の環境整備とガイダンス施設である大湯ストーンサークル館の建設を行っております。

環状列石の洗浄・保存処理により、野中堂環状列石と万座環状列石は今後も露出展示ができることとなり、配石遺構、掘立柱建物の復元や地形復元、植栽により、縄文時代の雰囲気が感じられるすばらしい史跡となりました。

平成14年度からは、第Ⅱ期環境整備計画地の資料収集を目的に、史跡の北西～西部の発掘調査に移行しております。その３年目となります今年度は史跡の西端の発掘調査を行い、このゾーンの性格などを推察できる資料を得ることができました。

本報告書はその成果をまとめたものであります。調査並びに報告書作成にご指導、ご協力いただきました関係機関、各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が環状列石の研究と保護、整備に大いに役立つよう念じてやみません。

平成17年３月

鹿角市教育委員会

教育長　織　田　育　生

例　　言

1　本報告書は、平成16年度に国庫補助金を得て実施した特別史跡大湯環状列石第21次発掘調査の成果をまとめたものである。調査の概要については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。

2　本報告書の執筆と編集は、三浦貴子が行った。

3　石器類の石質鑑定は秋田県立大館鳳鳴高等学校教頭　鎌田健一氏にお願いした。

4　土層や土器などの色調の記載には「新版　標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用した。

5　本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行25,000分の1「毛馬内」と鹿角市教育委員会作成の1,000分の1「特別史跡大湯環状列石現況地形図」である。

6　遺物の実測、拓本、トレースなどの一連の整理作業は調査員、調査補助員、整理作業員が行った。

7　本報告書に使用した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。

8　本報告書の文中において用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用されているものについては簡略している場合もある。

9　図版、表などで下記のような記号、スクリーントーンを使用した。

ＳＫ…土坑、ＳＸ(f)…焼土遺構、ＳＤ…溝状遺構、Pit…柱穴状ピット

▨…遺構確認面下の層　　▩…焼土

10　発掘調査並びに本報告書作成にあたり、下記の方々からご指導、ご助言をいただきました。心から感謝申し上げます。（敬称略、順不同）

小林達雄、冨樫泰時、沢田正昭、熊谷常正、安村二郎、阿部義平、本中　眞、小野健吉、市原富士夫、岡村道雄、藤田　登、小島朋夏、毛　瑞林、富永勝也、滝本　学

本 文 目 次

序

例言

本文目次

図版・写真図版・表目次

第Ⅰ章　遺跡の環境

1　遺跡の位置と立地 …… 1

2　周辺の地形・地質 …… 3

3　周辺の遺跡 …… 4

4　遺跡の層序 …… 7

第Ⅱ章　調査の概要

1　調査要項 …… 11

2　調査の方法 …… 12

3　調査の経過 …… 12

第Ⅲ章　G_5区の検出遺構と出土遺物

1　焼土遺構 …… 14

2　土坑 …… 14

3　柱穴状ピット …… 17

4　溝状遺構 …… 17

5　遺構外出土遺物 …… 19

(1)　土　器 …… 19

(2)　石　器 …… 19

第Ⅳ章　分析と考察

1　史跡西部の場の使われ方について …… 24

2　柱穴列について …… 28

第Ⅴ章　調査のまとめ …… 34

参考文献 …… 35

写真図版 …… 37

報告書抄録 …… 36

図版・写真・表目次

図 版 目 次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　調査区位置図 …… 2
第３図　発掘調査地周辺の地質柱状図 …… 3
第４図　大湯環状列石周辺の遺跡 …… 5
第５図　G_5区基本層序図(1) …… 8
第６図　G_6区基本層序図(2) …… 9
第７図　G_5区基本層序図(3) …… 10
第８図　G_5区遺構配置図・地形復元図 … 15
第９図　焼土遺構・溝状遺構実測図 …… 16
第10図　土坑・柱穴状ピット実測図 …… 18
第11図　遺構外出土土器片拓影図 …… 20
第12図　土器破片出土状況 …… 21
第13図　遺構外出土石器実測図 …… 22
第14図　石器出土状況 …… 23
第15図　史跡西部遺構配置図(縄文時代) … 25
第16図　史跡西部遺構配置図(歴史時代) … 26
第17図　史跡西部遺物分布図 …… 27
第18図　F_2区・F_3区遺構配置図 …… 29
第19図　D_9区・G_4区遺構配置図 …… 30
第20図　秋浦Ⅱ遺跡・白坂遺跡
検出の柱穴列 …… 32

写真図版目次

ＰＬ１　大湯環状列石全景
ＰＬ２　万座環状列石全景（平成11年当時）
ＰＬ３　Ａトレンチ全景・溝状遺構 …… 37
ＰＬ４　溝状遺構 …… 38
ＰＬ５　焼土遺構 …… 39
ＰＬ６　土坑 …… 40
ＰＬ７　調査風景 …… 41
ＰＬ８　遺構外出土遺物 …… 42

表　目　次

第１表　大湯環状列石周辺の遺跡 …… 6

第Ⅰ章　遺跡の環境

1　遺跡の位置と立地

遺跡の位置する鹿角市は、秋田県の北東部に位置し、北は小坂町、南は田沢湖町、西は大館市と比内町、東は岩手県と接している。米代川の上流域にあたり、東西の山々と盆地内の段丘地形及び沖積低地よりなる。この盆地を北上する米代川は、十和田地区で南流する小坂川と西流する大湯川を合流し、川幅を広くし、その流れを変え、大館盆地へ西流する。

米代川やその支流の両岸に発達した段丘上には縄文時代から近世に至る数多くの遺跡がある。特別史跡大湯環状列石もその一つであり、大湯川と豊真木沢川によってつくられた南西方向に延びた長さ5.6km、幅0.5～1.0km、標高150～190mの通称風張台地と呼ばれる舌状台地のほぼ中央部に位置している。遺跡周辺の標高は172～182m、北側水田との比高は約60mである。本遺跡の南西3.5kmには国立公園十和田湖への南玄関口であるＪＲ花輪線十和田南駅が、同3.6kmには東北縦貫自動車十和田インターがある。

本年度の調査区であるG₅区は、史跡の西端部で、東から西方向に緩く傾斜している。以前はリンゴ畑や普通畑であったが、公有化後原野となっている。

第１図　遺跡位置図

第2図　調査区位置図

2　周辺の地形・地質

鹿角市内の地形は、東西の山地、盆地内の段丘地形及び沖積低地よりなる。

東側の山地は800～1100mの標高で、四角岳（1003m）、川投岳（1122m）、五ノ宮嶽（1115m）などを中心とする急峻な壮年期の山地である。地質は下位より安久谷川層、瀬の沢層、大葛層、遠部層などの新第３紀の堆積岩類、火山岩類からなる。

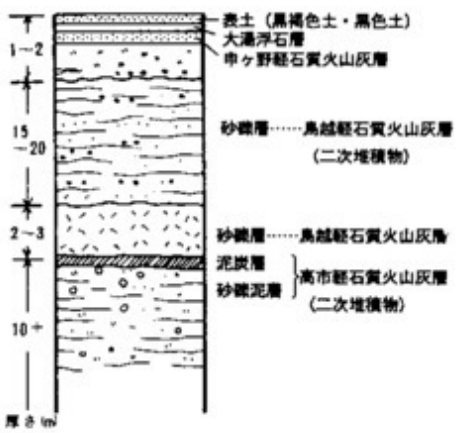
西側の山地は、標高400～600mの丘陵性の山地で、地質は東側同様新第３紀中新世の大葛層、大滝層、遠部層、樫内層で構成される。

鹿角盆地はこれらの山地に囲まれ、台地、段丘、低地が至る所にみられる。特に北部には十和田火山由来のシラス台地が分布し、東部や南部は脊梁山脈を源とする河川によって形成された扇状地地形が特徴である。

盆地内の段丘は、大きく４段に分けられる。最高位の面は浦志内川や歌内川などが盆地に注ぐ付近に扇状地状にみられる面で、標高270～330m、傾斜がやや険しく、かなり解析されている。主として河成の亜角礫や角礫からなり、風化が著しい。次の２段目は、標高180～250mで、南部で扇状地状の地形を残すものの、大里以北では厚い火砕流堆積物に覆われ、火砕流台地としての形状を示している。関上面や鳥越面と呼ばれ、盆地内ほぼ全域に分布している。本遺跡もこの段丘上にある。３段目は、標高180～250mで、主として米代川左岸に沿い、尾去沢から松館、荒町にかけて分布している。松館面と呼ばれ、夜明島川や黒沢川などによる扇状地の解析された面と考えられている。４段目は米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で、大里面と呼ばれている。標高は150～155mと低く、上部は砂礫層を主としている。

沖積低地は、米代川やその支流沿いにあり、標高は100～120mで、主として砂礫層からなる。

発掘調査地周辺の地質は大きく分けて、４枚の火山灰層よりなる。最下部は高市軽石質火山灰の二次堆積物で、軽石や砂礫からなり、地層中に平行ラミナやクロスラミナが発達している。この上に薄い泥炭層をはさみ、厚さ２～３メートルの鳥越軽石質火山灰層が、その上に水の作用によって堆積した鳥越火山灰層の二次堆積物である軽石質段丘砂礫層が15～20m重なる。さらに、この上に風化の進んだ大型の軽石礫を含む申ヶ野軽石質火山灰層が１～２m重なる。最上部は黒褐色土や黒色土で、その間に大湯浮石層（十和田ａ降下火山灰）がみられる。



第３図　発掘調査地周辺の地質柱状図

3　周辺の遺跡

鹿角市内には、416の遺跡がある。大湯環状列石周辺の分布密度も高く、特に縄文時代の遺跡の多さが目につく。第４図は大湯環状列石周辺の縄文時代中期後葉から後期の遺跡の分布図である。これまでに発掘調査された遺跡や列石との関連が考えられる遺跡について、その概要を記する。

黒森山麓竪穴群遺跡(1)は、昭和45年に十和田町教育委員会によって調査が行われている。縄文時代中期末の竪穴住居跡５軒他が確認され、遺構外からは後期の土器も出土している。

下内野Ⅱ遺跡(2)は、平成11年に携帯電話の電波塔建設に伴い、約100㎡が調査された。その結果、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡６軒、フラスコ状土坑７基が確認され、大規模な集落跡と考えられている。遺構外から後期の土器も多量出土しており、後期の遺構の存在も予想される。

下内野Ⅲ遺跡(3)は、昭和60年頃に発見された遺跡で、遺跡の種別は配石遺構となっている。平成元年の遺跡詳細分布調査時には畑境に抜き取られたと考えられる川原石が山積みとなっていた。小清水遺跡(4)からも抜き取られたと考えられる川原石が畑境に積まれていたのを確認している。いずれの遺跡にも、環状列石や配石遺構の存在が考えられる。

上屋布Ⅱ遺跡(5)、堤尻Ⅰ・Ⅱ遺跡(6)、申ヶ野Ⅴ遺跡(6)は大湯環状列石と同じ台地上にあり、同時期の遺跡であることから、関連が考えられる。

草木Ａ(3)遺跡は、昭和49年に広域農道建設に先立って調査されている。この調査では遺構は検出されていないが、後期後半の土器が出土している。調査地点の後背には平坦な畑地が広がっており、集落の存在も予想される。

高屋館跡(8)は、昭和63～平成元年に農免農道建設に伴い、秋田県教育委員会が発掘調査を行っている。環状列石と掘立柱建物群が発見されており、大湯環状列石との関連が注目されている。

下砂沢遺跡(22)は、平成元年に工業団地造成に伴って発掘調査を行い、配石遺構２基他が検出されている。

第４図　大湯環状列石周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地	種別	時期
1	黒森山麓竪穴群	鹿角市十和田大湯字上内野 100-1	集落跡	縄文時代中期末葉
2	下内野Ⅱ	〃 大湯字下内野 43	集落跡	縄文時代中期末葉
3	下内野Ⅲ	〃 大湯字室ノ沢口、下内野	配石遺構	縄文時代後期
4	小清水	〃 大湯字小清水 7	配石遺構	縄文時代後期
5	上屋布Ⅱ	〃 大湯字上屋布 25、26 他	遺物包含地	縄文時代後期
6	堤尻Ⅰ・Ⅱ	〃 大湯字堤尻 3-1	遺物包含地	縄文時代後期
7	和町Ⅰ	〃 大湯字和町 117-2 他	遺物包含地	縄文時代後期
8	根市	〃 大湯字根市 20-25	遺物包含地	縄文時代後期
9	松舟	〃 草木字松舟 19. 20 他	遺物包含地	縄文時代後期
10	崩原	〃 草木字崩原 24-1	遺物包含地	縄文時代後期
11	保田Ⅱ	〃 草木字保田 49-2	遺物包含地	縄文時代後期
12	高間館	鹿角市花輪字菩提野 96.97 他	遺物包含地	縄文時代後期
13	草木A	鹿角市十和田草木字小坂 12 他	遺物包含地	縄文時代後期～晩期
14	丸館Ⅳ	〃 草木字丸館 44-2 他	遺物包含地	縄文時代後期
15	土木	鹿角市花輪字土木 7-2 他	遺物包含地	縄文時代中期～後期
16	申ヶ野Ⅴ	鹿角市十和田錦木字申ヶ野 2-1	遺物包含地	縄文時代後期
17	平元館	鹿角市花輪字源田平 6-1	遺物包含地	縄文時代後期、平安時代
18	高屋館跡	〃 字館ノ沢、字大田谷地	環状列石	縄文時代後期、中世
19	板橋Ⅱ	鹿角市十和田末広字板橋 32 他	遺物包含地	縄文時代後期
20	上ノ野Ⅳ	〃 末広字上野 70-1	遺物包含地	縄文時代中期～後期
21	吹越Ⅱ	〃 山根字吹越 12	遺物包含地	縄文時代後期
22	下砂沢	〃 山根字上ノ平 1-6	配石遺構	縄文時代前期～後期
23	竹林	〃 岡田字竹林 11-1	遺物包含地	縄文時代後期
24	湯坂Ⅱ	〃 毛馬内字湯坂 37-1	遺物包含地	縄文時代後期
25	寺ノ上Ⅲ	〃 毛馬内字寺ノ上 30	遺物包含地	縄文時代後期
26	寺ノ上Ⅰ	〃 毛馬内字寺ノ上 6	遺物包含地	縄文時代後期
27	柏崎館跡	〃 毛馬内字柏崎、字二ノ丸	遺物包含地	縄文時代後期～晩期、中世

第1表　大湯環状列石周辺の遺跡

4　遺跡の層序

ここでは、表土から申ヶ野軽石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層までについて記載する。それ以下の地層については、先に述べたとおりである。

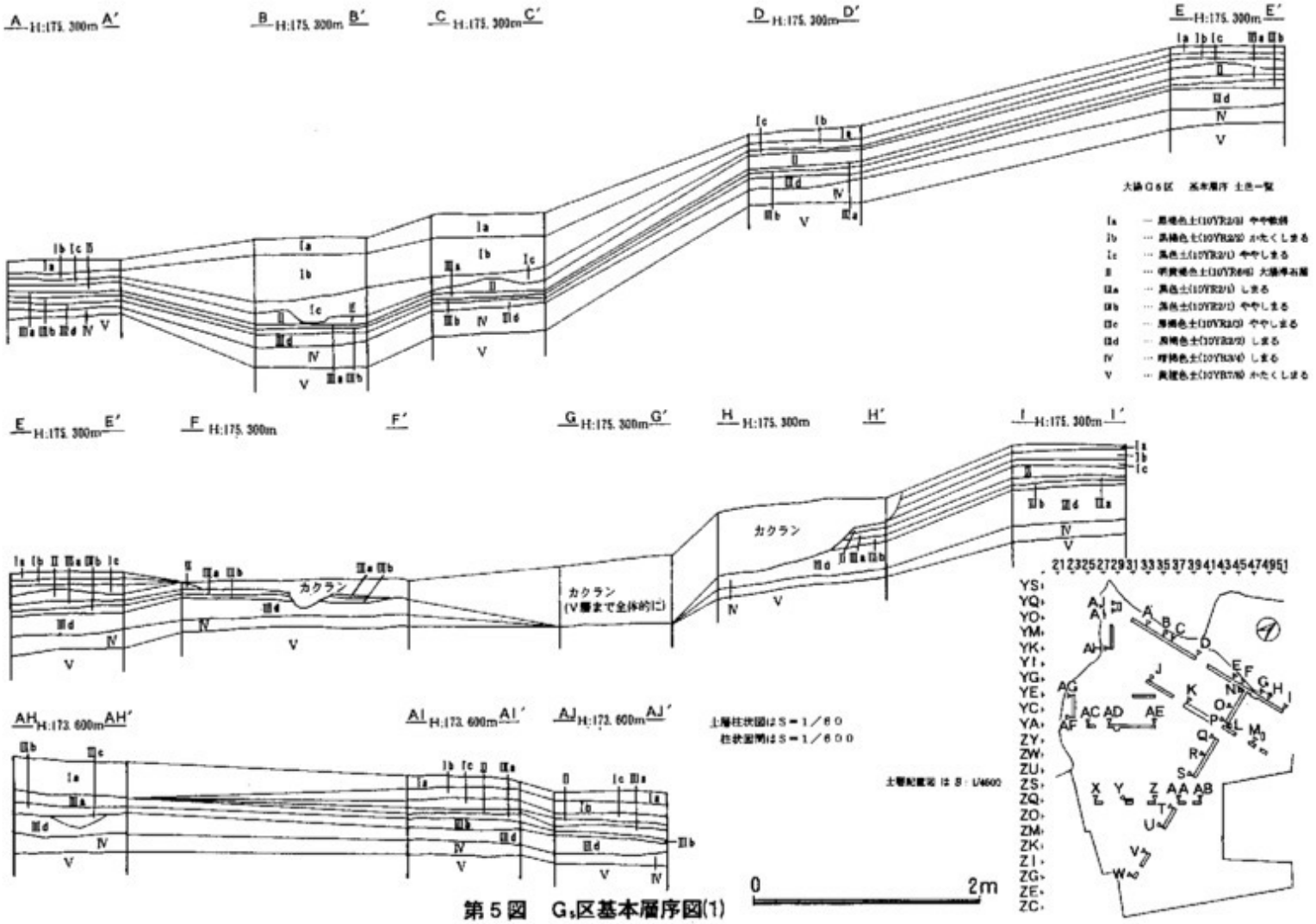
第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、表土の厚い地点では色調や堅さからさらに３層（Ⅰa～Ⅰc層）に分層できる。

第Ⅱ層は明黄褐色の浮石層で、大湯浮石層と呼ばれている。青森県や岩手県北部に堆積している十和田ａ降下火山灰と一連のものであり、約1000年前の十和田湖の噴火によって噴き上げられた降下軽石と考えられている。

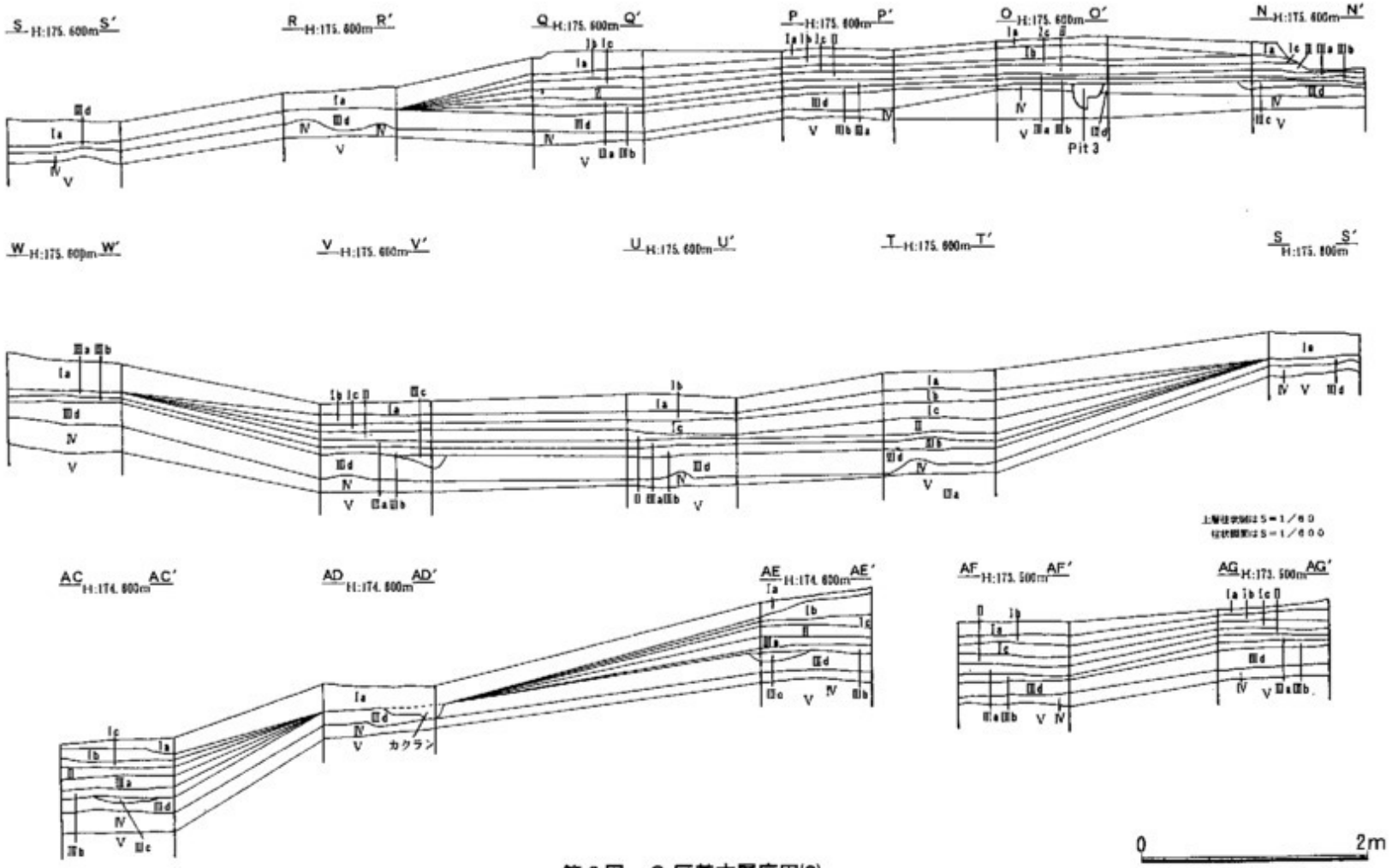
第Ⅲ層は大湯浮石層下から地山直上の暗褐色土（Ⅳ層）までの黒色または黒褐色の土層である。色調や堅さなどから４層（Ⅲa～Ⅲd）に細分される。

第Ⅳ層は地山直上（下位火山灰）の層で、暗褐色で、若干粘性があり、しまりのある層である。

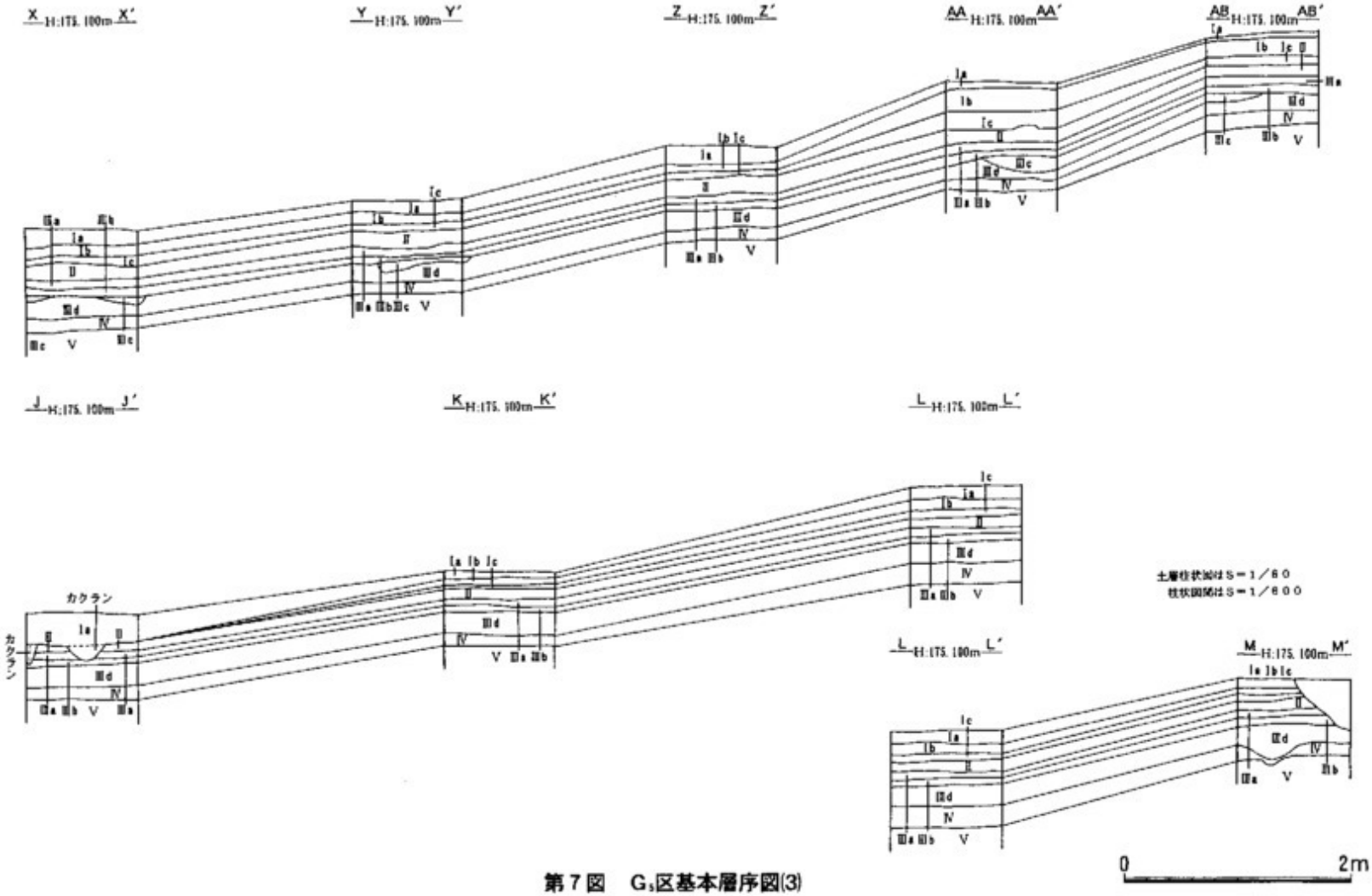
第Ⅴ層は先に述べたとおり、申ヶ野火山灰層と考えられる黄褐色の火山灰層である。本層は上位に堆積する大湯浮石層に対比し下位火山灰、あるいは関東ロームに相当するところからロームと呼ばれているものである。本報告書では、本層をⅤ層以外に下位火山灰や地山と表現している。



第５図　G₅区基本層序図(1)



第6図　G₈区基本層序図(2)



第７図　G₅区基本層序図(3)

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査要項

1．遺　跡　名　特別史跡大湯環状列石（遺跡番号：123）

2．調査目的　史跡南西側での住居跡の有無、第20次調査で確認された柱穴列の広がりの確認を行うとともに、史跡南西部における遺構、遺物の分布状況を確認する。

3．調　査　地　鹿角市十和田大湯字野中堂　　ほか

4．発掘調査面積　Gs区　770㎡

5．調査期間　発掘調査　平成16年10月５日～平成16年12月16日

整理・報告書作成　平成16年12月17日～平成17年３月31日

6．調査主体者　鹿角市教育委員会

7．調査担当者　鹿角市教育委員会　生涯学習課　文化財班

主事　三浦貴子

8．調査参加者　調査指導　吉川耕太郎（秋田県教育庁生涯学習課　文化財保護室文化財主事）

調査員　鎌田健一（秋田県立大館鳳鳴高等学校　教頭）

山谷昌久（鹿角市立八幡平中学校　教諭）

調査補助員　松田隆史、川又庸好、田中辰美、高橋秀明

発掘調査作業員

兎沢サツ子、柳舘愛子、児玉フデ、柳沢ヤス、木村キン、関　イサ、田中美千栄、成田由紀子、三浦茂雄、大森勝次、佐藤一祐、石川三郎、赤坂繁昭、黒沢陸雄、兎沢優子、兎沢寛馳子、黒沢珠子、湯瀬トキ、湯瀬晴子、柳沢勝江、成田則子、加賀ユキ子

整理作業員

柳沢千晶、黒沢文子、工藤稔昭、大里裕子、米田ゆかり、村木照子、青山久美子、柳館靖子、柳館千代子、安保和徳、関　美保、佐藤正崇、島田勇人

9．事　務　局　鹿角市教育委員会　生涯学習課

課長　村木伸夫

文化財班長　　秋元信夫
主　　事　　上田　学
主　　事　　三浦貴子

10. 協力機関　文化庁文化財部記念物課，秋田県教育委員会，秋田県埋蔵文化財センター，大湯ストーンサークル館

2．調査の方法

調査区内のグリッド設定については，現地においては仮グリッドとし，整理作業，報告書作成にあたり，第1次発掘調査以来のN－49°－Wを基準線としたグリッドに戻している。グリッドの名称は，アルファベットと算用数字を組み合わせ，西側の杭をもってグリッド名とした。

調査は，遺跡の保存を第一義に遺構の分布状況や旧地形を読み取ることができるようにトレンチを設定した。なお，遺構の分布を確認するため，一部については面的に広げて調査を行ったところもある。

Ⅱ層以下については，人力による分層発掘とし，極力上面での遺構確認につとめたが，後世の撹乱がおよぶ地域や遺構確認のしづらい地域では第Ⅳ層，第Ⅴ層まで掘り下げた区域もある。

確認された遺構については，発見順に番号を付した。遺構の精査については，後に追調査が可能であるように配慮し，半裁するにとどめた。

遺構の実測図の作成については，グリッド杭を利用し，簡易遣り方測量を行い，縮尺1／20，1／10で図化した。なお，現地で作成した実測図については，報告書作成段階に記録写真，調査員メモをもとに修正を加え，トレースを行っている。

遺物の取り上げについては，基本的に出土ポイント，レベル測量を行い，基本層序と対比できるようにしたほか，袋詰めに際しては出土地点や層位を書き込んだ遺物カードを同封した。

写真撮影については，小型一眼レフカメラ2台とデジタルカメラを使用し，調査の過程や遺物出土状況などを記録した。

3．調査の経過

特別史跡大湯環状列石第21次発掘調査は，平成16年10月５日より開始し，現地調査が終了したのは12月16日である。

10月５日，調査作業員に事務連絡および本年度の調査の目的，方法を説明する。その後，調査区南西側から掘り下げを開始する。遺物が出土した場合には残しつつ掘り下げ，各層で遺構確認を行った。本調査区はかつて畑として使われていたため，火山灰層まで撹乱されていることが多く，各層の確認，遺構の確認に難渋する。

10月８日には、調査区南西部で焼土遺構が検出される。その後、焼土遺構が調査区全域に点在していることが確認される。

10月、11月は天候に恵まれ、晴天が続くが、徐々に日が短くなる中、遺構確認や写真撮影に難渋する。調査区北部では平安時代の溝状遺構が検出される。

11月9日、10日には特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会が開催され、発掘調査ならびに環境整備について指導と助言をいただく。

確認した遺構の精査、記録、遺物の取り上げなど、すべての作業が終了したのは12月16日である。12月24日には鎌田調査員が調査区内の出土岩石の鑑定を行った。なお、２月６日には、大湯ストーンサークル館講座「縄文に学ぶ」において本年度の調査成果を発表した。

第Ⅲ章　G_5区の検出遺構と出土遺物

G_5区において、確認された縄文時代の遺構は焼土遺構５基、土坑４基、柱穴状ピット３個であり、平安時代の遺構は溝状遺構１条である。

また、遺構外より縄文土器破片36点、石器３点の出土があった。

１．焼土遺構（第９図）

焼土遺構は調査区西部および南東部に点在している。本調査区では５基確認された。

第１号焼土遺構

調査区中央部ZQ－30グリッドに位置し、Ⅲa層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は130（推定値）×111cmを測り、焼土は28×29cmを測る。遺物は出土しなかった。

第２号焼土遺構

調査区北部ZX－41グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は110×100cmを測り、焼土は60×43cmを測る。遺物は出土しなかった。

第３号焼土遺構

調査区南西部YN～YO－28グリッドに位置し、Ⅲa層下位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は164（推定値）×122cmを測り、焼土は124（推定値）×64cmを測る。遺物は出土しなかった。

第４号焼土遺構

調査区南西部YM～YN－28グリッドに位置し、Ⅲb層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は52×34cmを測り、焼土は18×11cmを測る。遺物は出土しなかった。

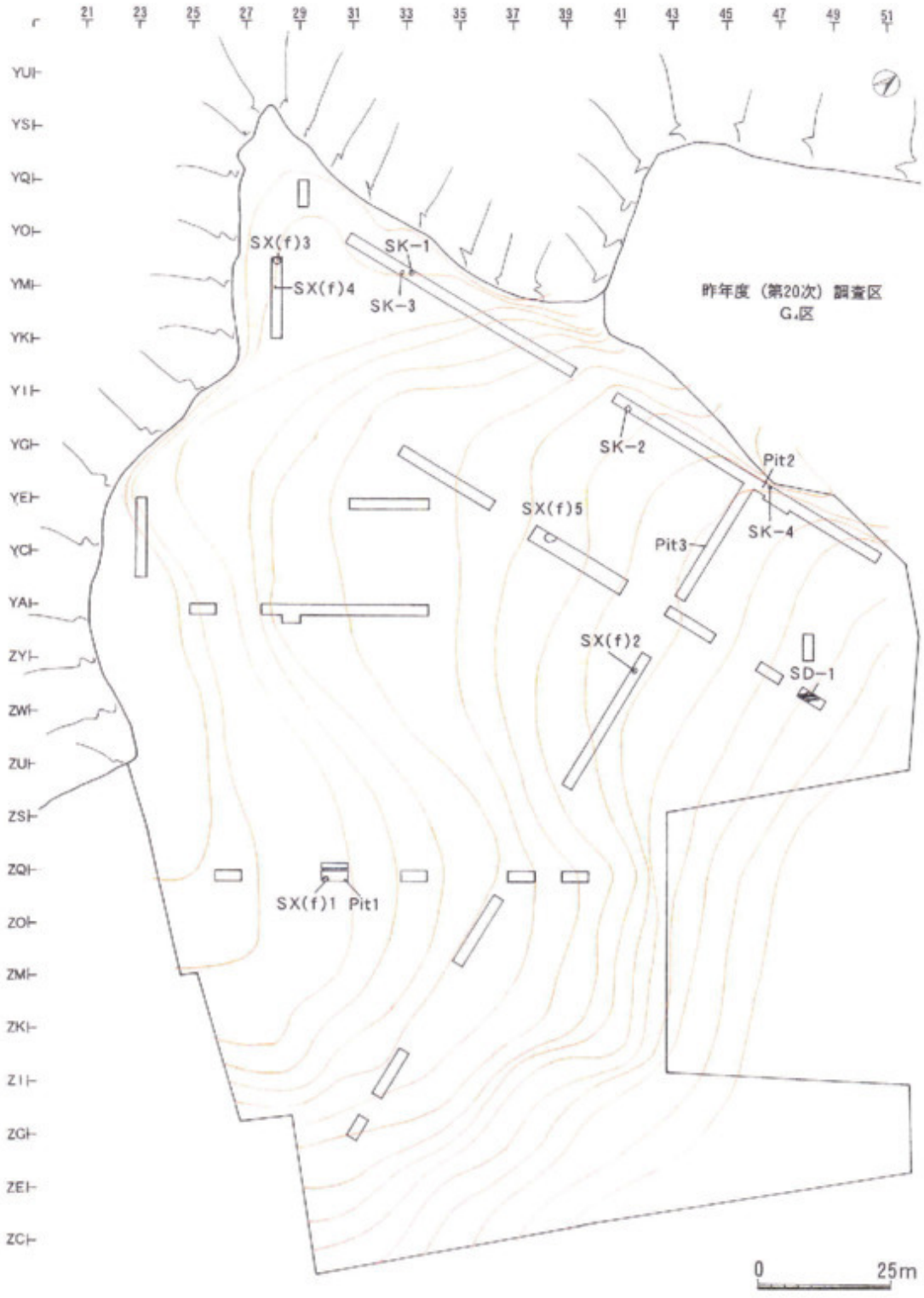
第５号焼土遺構

調査区北西部YD－38グリッドに位置し、Ⅲa層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は226×163（推定値）cmを測り、焼土は50×38cmを測る。遺物は出土しなかった。

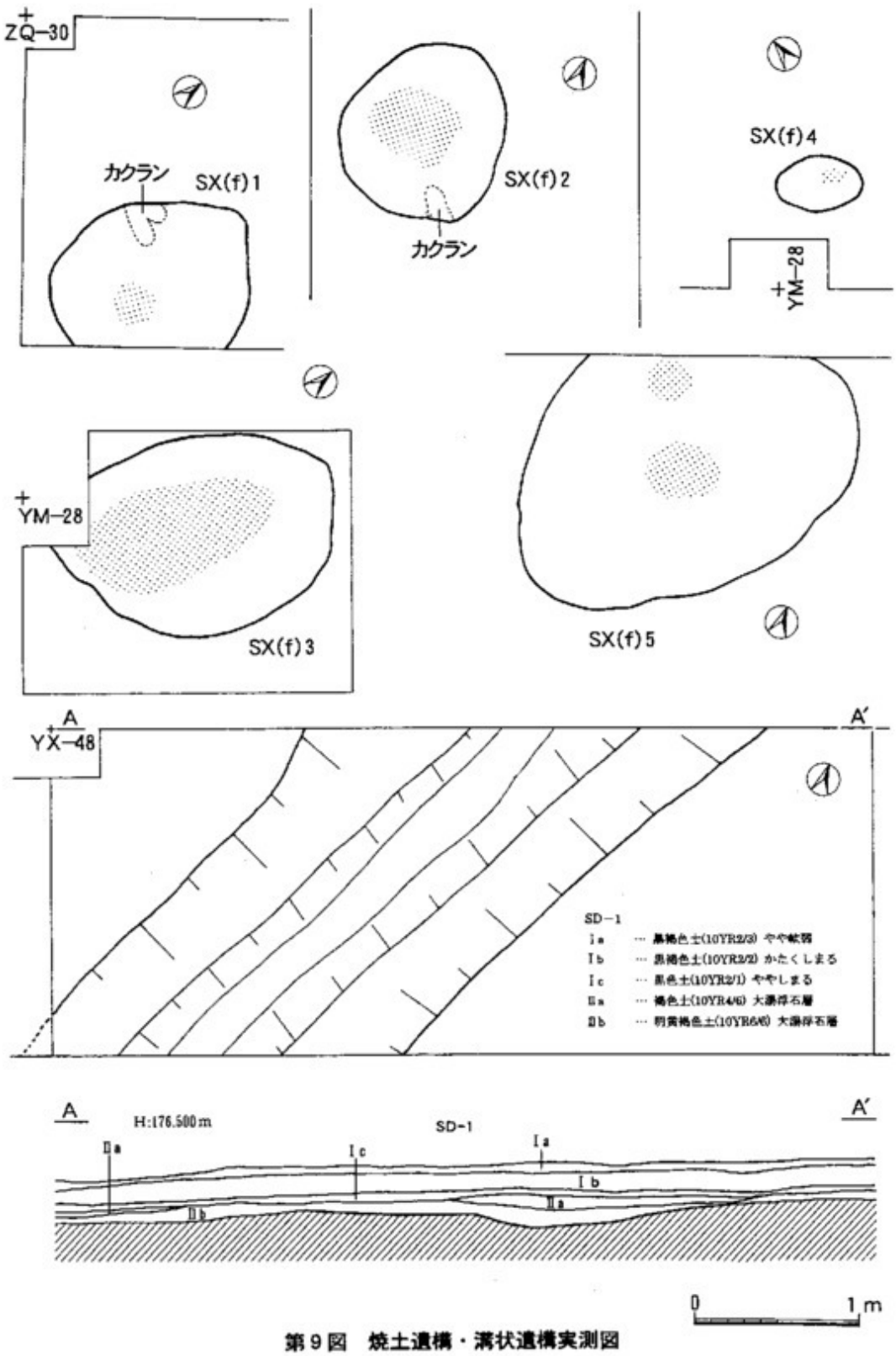
２．土　　坑（第10図）

第１号土坑

調査区南西部YN－32グリッドに位置し、Ⅳ層面で確認した。構築面はⅢd層上面である。規模は長軸93cm（推定値）×短軸74cm、深さ20cmを測る。平面形は楕円形で、長軸方向はN－５°－Wである。底面は平坦で、垂直に立ち上がる。堆積土は２ブロックに区分され、人為堆積である。



第８図　G₃区遺構配置図・地形復元図



第９図　焼土遺構・溝状遺構実測図

遺構内より遺物は出土していない。

構築時期は構築面から縄文時代後期と考えられる。

第２号土坑

調査区北西部YI－41グリッドに位置し、Ⅳ層面で確認した。構築面はⅢｄ層上面である。規模は長軸98cm（推定値）×短軸100cm、深さ27cmを測る。平面形は楕円形で、長軸方向はN－11°－Eである。底面は平坦で、垂直に立ち上がる。堆積土は２ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より遺物は出土していない。

構築時期は構築面から縄文時代後期と考えられる。

第３号土坑

調査区南西部YN－33グリッドに位置し、Ⅳ層面で確認した。構築面は確認できなかった。規模は長軸81cm×短軸69cm、深さ15cmを測る。平面形は楕円形で、長軸方向はN－３°－Eである。底面は鍋底状で、ややゆるやかに立ち上がる。堆積土は２ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より遺物は出土していない。

構築時期は不明である。

第４号土坑

調査区北西部YF－46グリッドに位置し、Ⅳ層面で確認した。構築面は確認できなかった。規模は長軸70cm×短軸53cm、深さ18cmを測る。平面形は楕円形で、長軸方向はN－87°－Wである。底面は鍋底状で、垂直に立ち上がる。堆積土は１ブロックで、人為堆積である。

遺構内より遺物は出土していない。

構築時期は不明である。

３．柱穴状ピット（第10図）

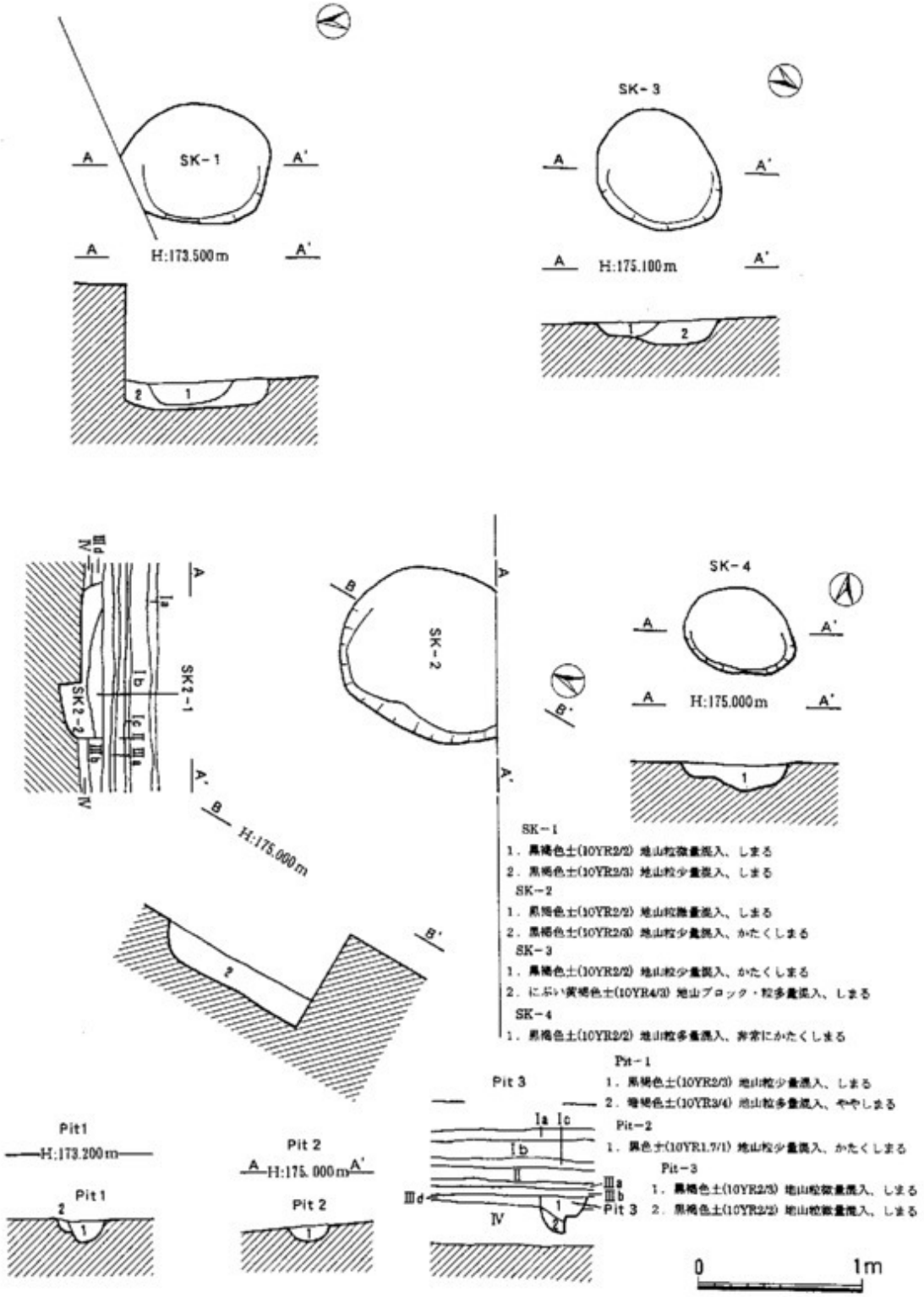
G_s区からは３個の柱穴状ピットが確認された。これらの柱穴状ピットは、調査区全体に点在しており、規模は径21～26cm、深さ9～23cmを測る。

４．溝状遺構（第９図）

G_s区からは１条の溝状遺構が検出された。

調査区北部ZX－48グリッドに位置し、Ⅱ層である十和田a火山灰（大湯浮石）除去と同時に確認された。

構築時期は、確認面から大湯浮石降下直前と考えられる。



第10図　土坑・柱穴状ピット実測図

5．遺構外出土遺物

遺構外より出土した遺物は，縄文土器破片36点，石器３点である。

(1) 土　器

後期初頭から前葉の土器（第11図７，８，11）

３類：沈線が施文された土器

a　主文様が縦位に施文される土器

主文様が縦位に施文された土器を一括した。焼成は良好で，色調は浅黄橙色，にぶい黄橙色を呈する。

後期初頭から中葉の土器（第11図）

１類：無文の土器

深鉢形土器，ミニチュア土器が見られる。内外面ともに丁寧な調整が見られ，焼成も良好である。

２類：縄文の土器

本類には無節，単節，複節の縄文が施文されたものを一括した。本調査区から出土した土器破片はすべて単節の縄文が施文されたものである。

３類：撚糸文の土器

撚糸文が施文された土器を一括した。焼成は良好で，色調はにぶい黄橙色を呈する。

(2) 石　器（第13図）

敲　石

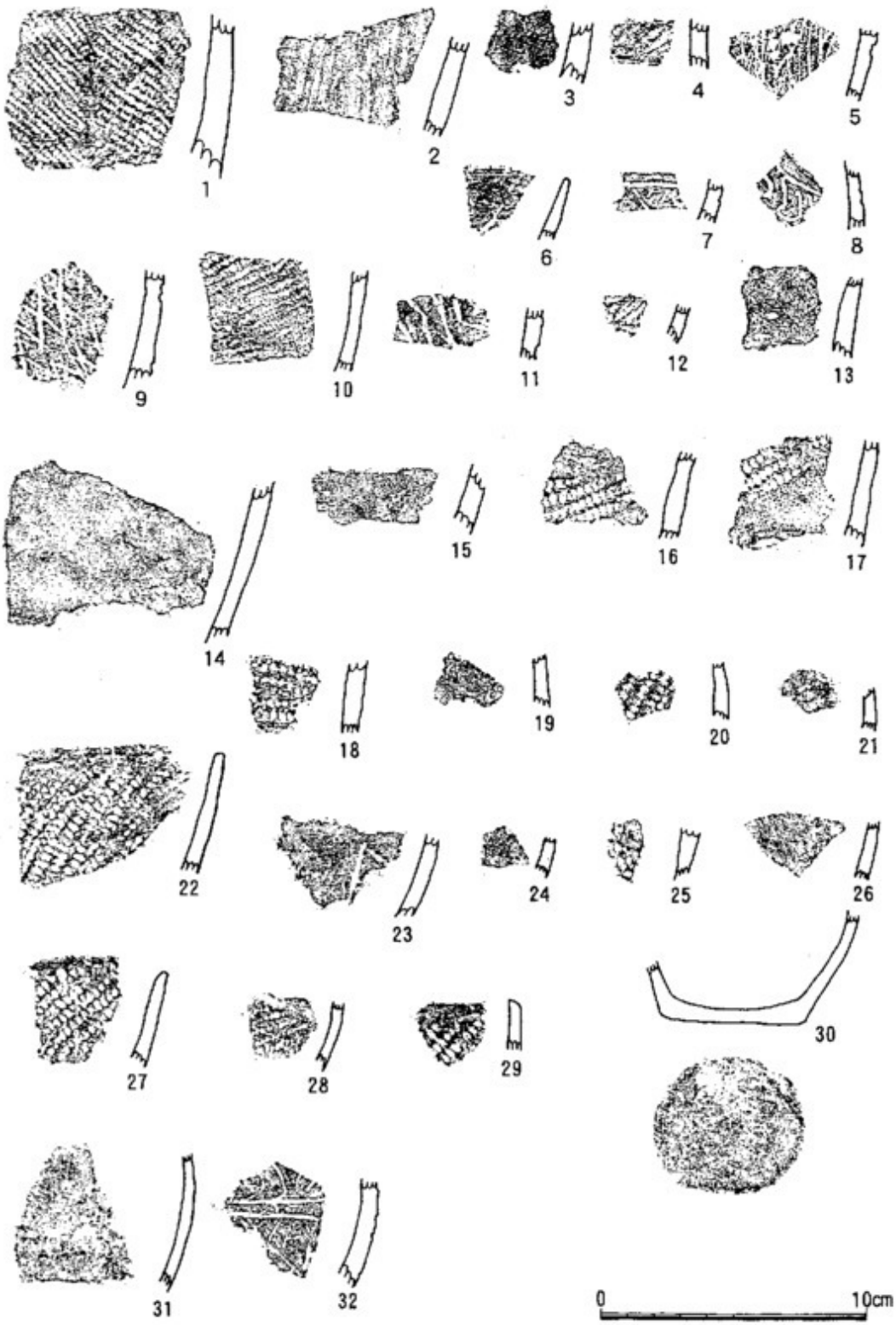
本調査区から１点出土した。扁平な川原石で，石の側縁部に敲打痕がみられる。石材は，泥岩である。

凹　石

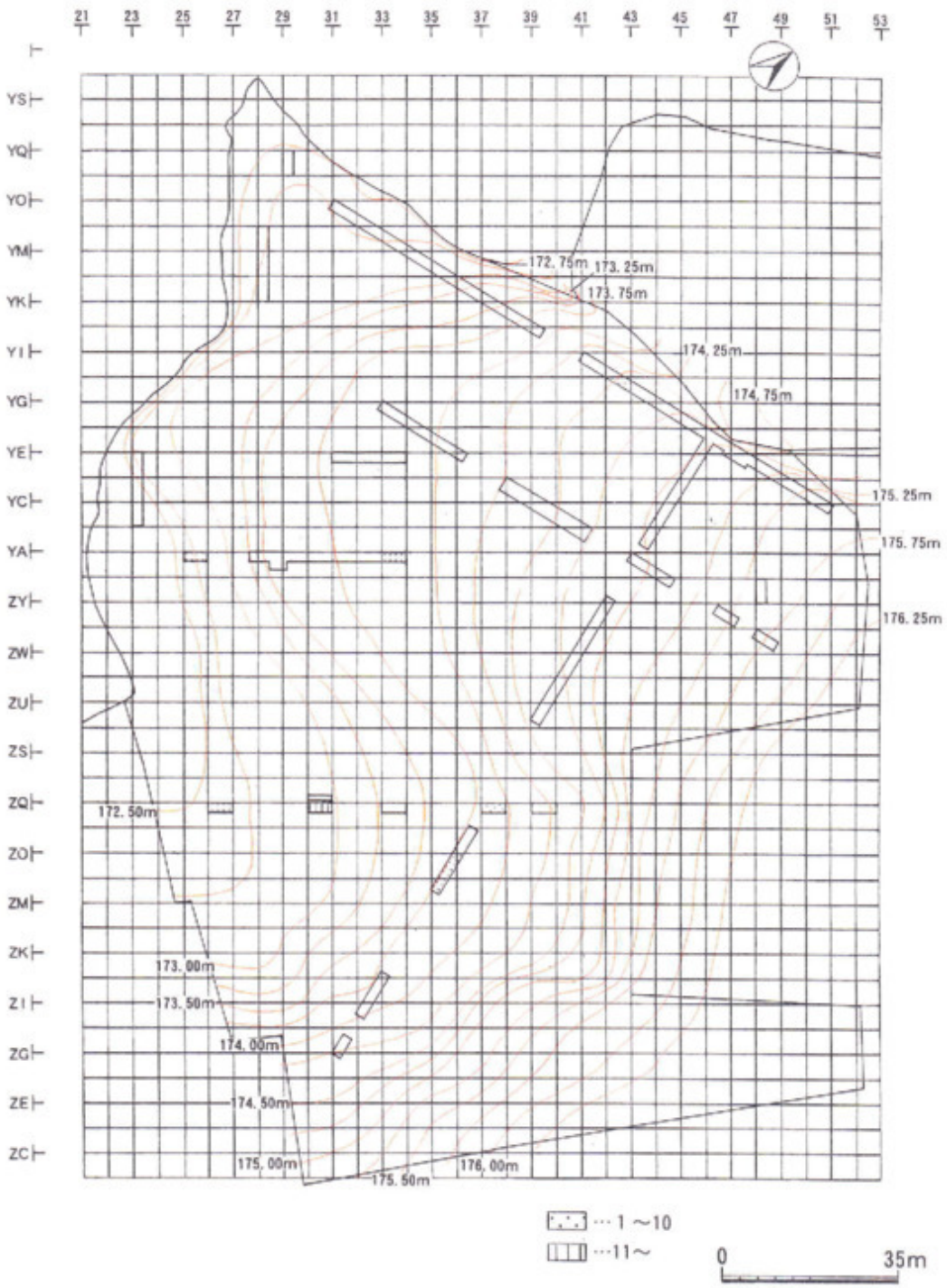
本調査区から１点出土した。扁平な川原石で，平坦面に使用痕がみられる。石材は，石英安山岩である。

磨　石

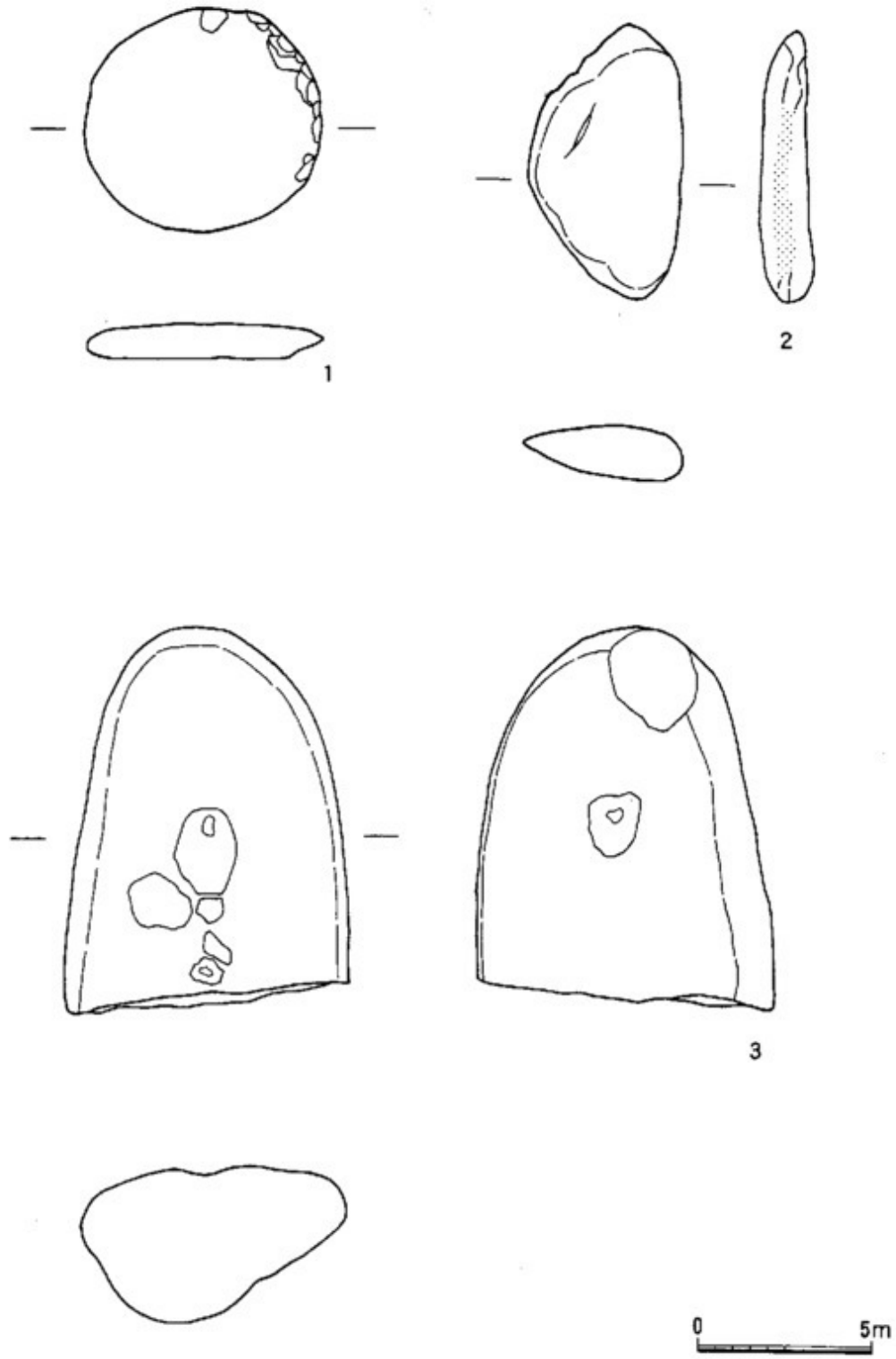
本調査区から１点出土した。扁平な石の側面を使用している。石材は，粘板岩である。



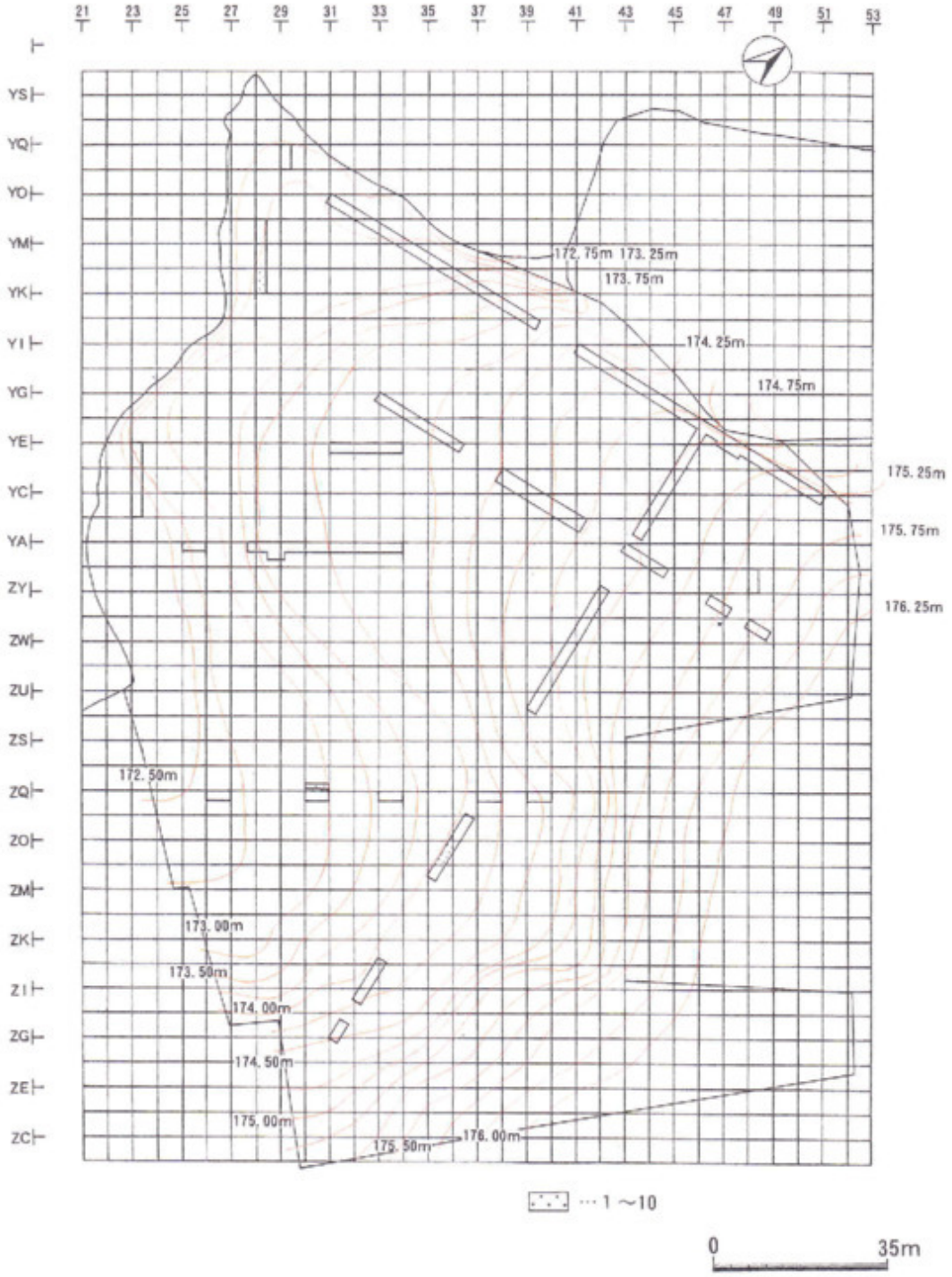
第11図　遺構外出土土器片拓影図



第12図　土器破片出土状況



第13図　遺構外出土石器実測図


21
23
25
27
29
31
33
35
37
39
41
43
45
47
49
51
53
YS
YQ
YO
YM
YK
YI
YG
YE
YC
YA
ZY
ZW
ZU
ZS
ZQ
ZO
ZM
ZK
ZI
ZG
ZE
ZC
172.75m
173.25m
173.75m
174.25m
174.75m
175.25m
175.75m
176.25m
172.50m
173.00m
173.50m
174.00m
174.50m
175.00m
175.50m
176.00m
… 1 ～10
0
35m

第14図　石器出土状況

第Ⅳ章　分析と考察

1．史跡西部の場の使われ方について

各調査区の成果については、各年度の発掘調査報告書において報告しているが、今年度の調査により史跡内における万座環状列石西側の発掘調査が終了することから、今年度の調査の成果をふまえた上で、史跡西部の場の使われ方について述べたい。

史跡西部は、台地斜面に湧水地点が点在する区域で、万座環状列石に向かって延びる沢が何本も入り組んでいる、起伏の激しい複雑な地形であった。

(1)　縄文時代について（第15図）

史跡西部において、縄文時代早期～中期の時期の遺構は検出されず、遺物が少量出土する。よって縄文時代早期～中期にかけて、この区域はほとんど使用されていなかったことが明らかである。

縄文時代後期になると、沢状地形の沢頭部分にTピットが構築される。このことは、遺跡の変遷とも合致しており、万座・野中堂の二つの環状列石が作られる前は、狩猟の場として使用されていたことをあらわしている。その後、台地縁辺部下にある湧水地点を囲むように西側縁に竪穴住居跡が構築され、その周辺部に貯蔵のためのフラスコ状土坑などが構築されている。また、史跡南西端には小規模な土坑が構築される。

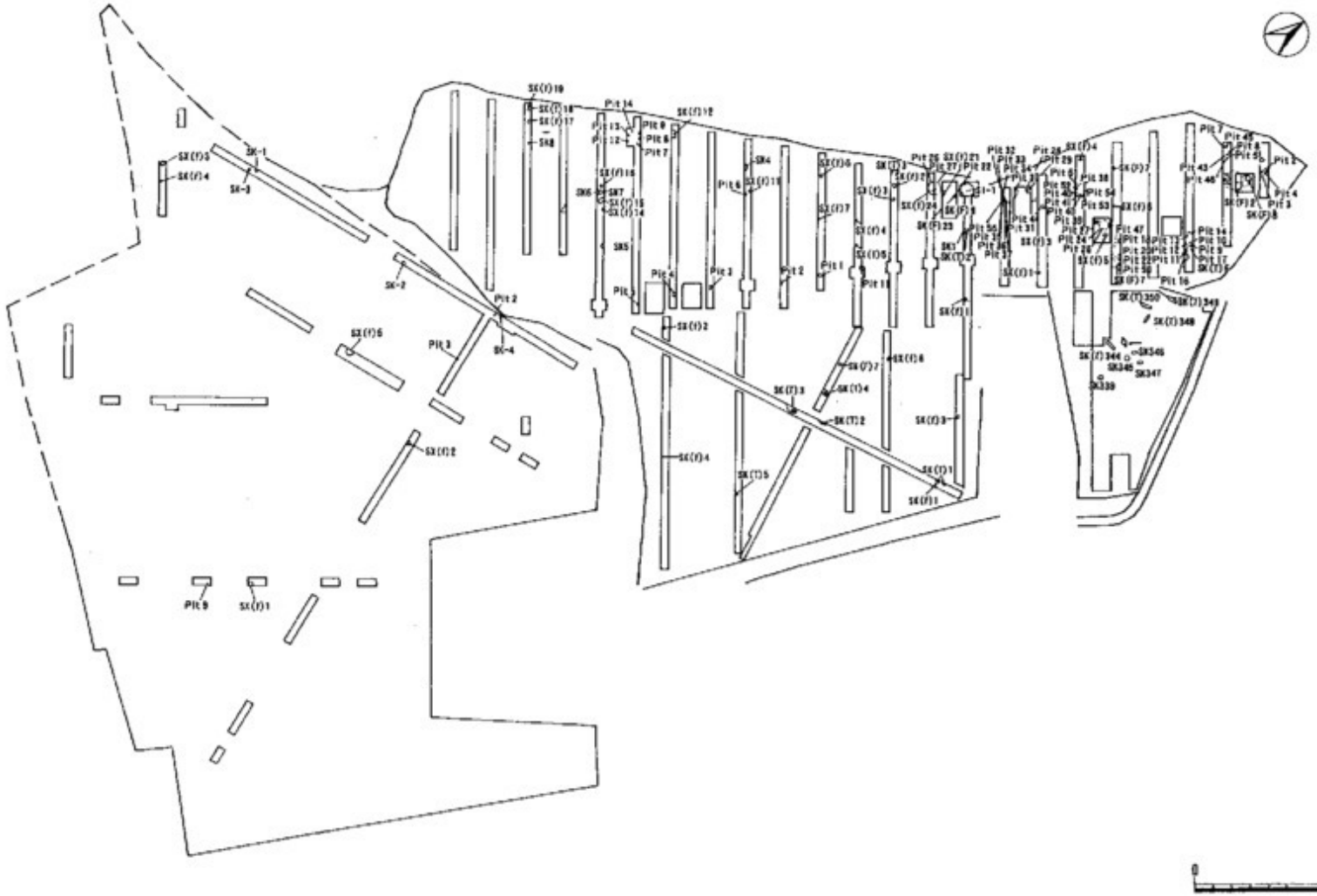
縄文時代晩期の遺構・遺物はわずかな検出に限られ、縄文時代晩期には、この区域はほとんど利用されなくなったことが伺える。

(2)　平安時代について（第16図）

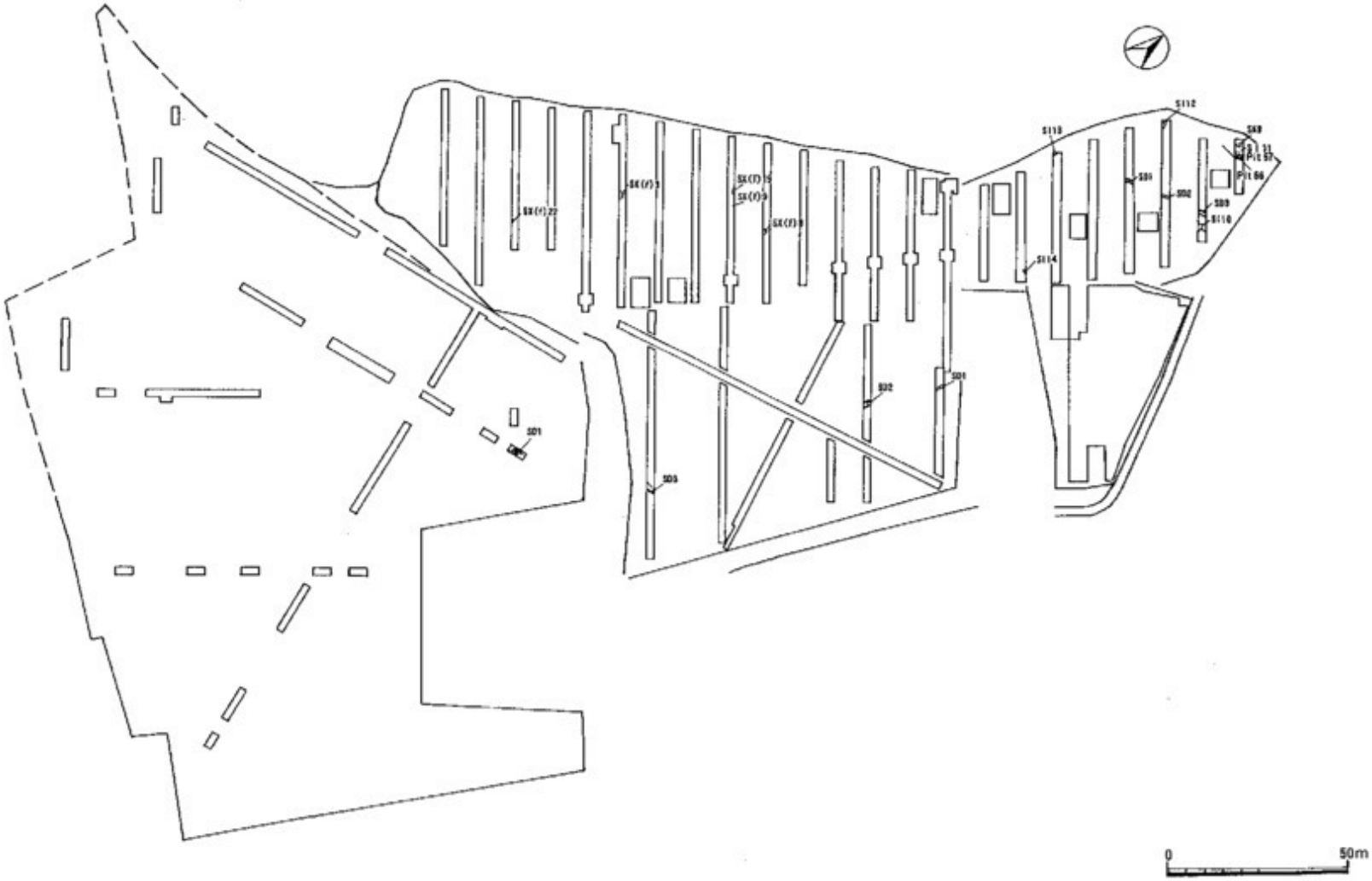
平安時代になると、かつて縄文時代の竪穴住居跡が構築された西側縁に再び竪穴住居跡が構築されるようになる。このころ、史跡南西側では沢が埋まり、新たに生じたスペースを利用して平安時代の人々が火を焚いたとみられ、縄文時代には沢の底であった地点の上面から平安時代の焼土遺構が検出されている。

(3)　遺物について

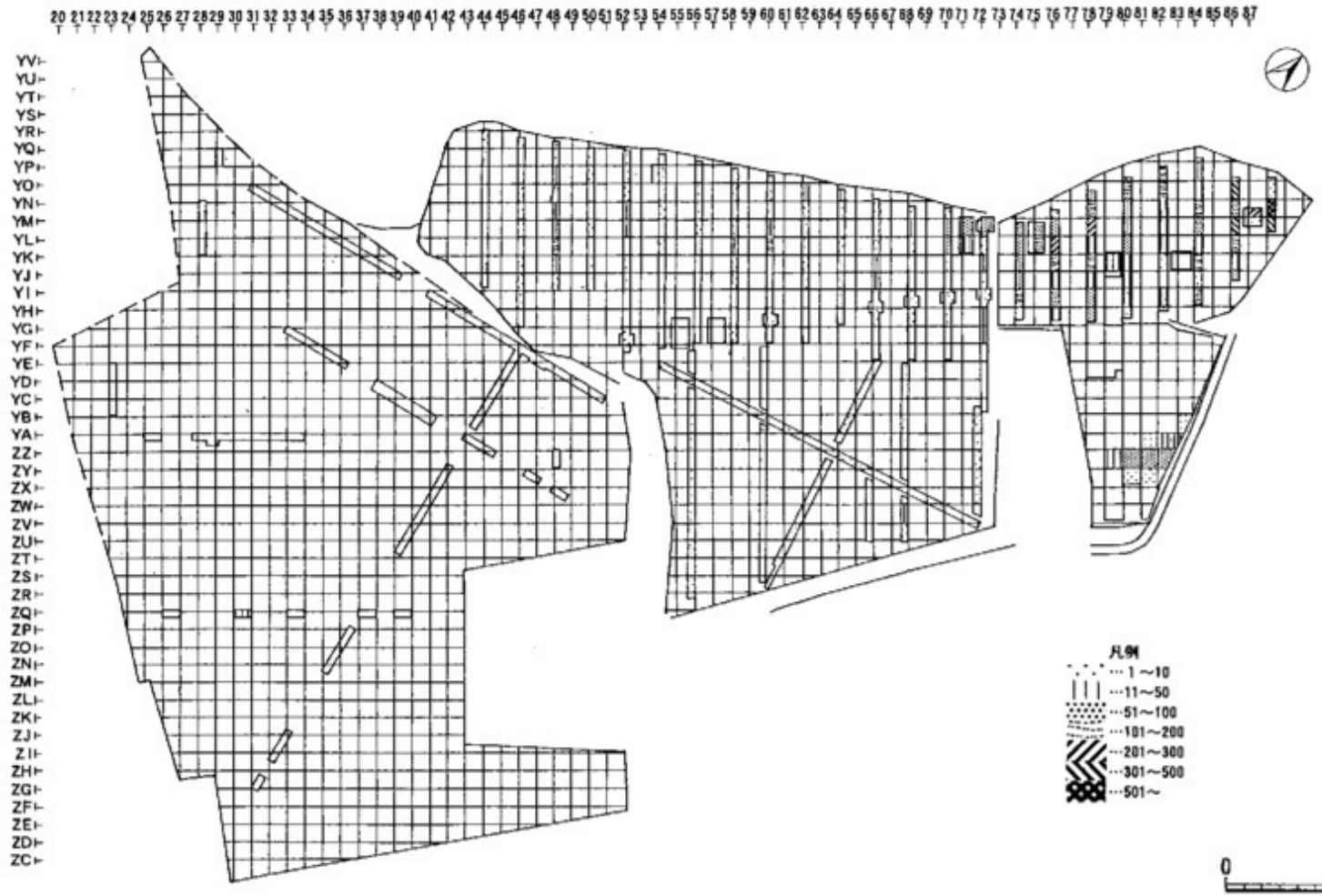
史跡西部における遺物の出土状況は、第17図のとおりである。縄文時代・平安時代の竪穴住居跡が検出された西側縁に集中することがわかる。全体的に、万座環状列石からの距離が大きくなるほど遺物の出土は減少する傾向にあるが、南西側縁に土器破片が集中する地点がある。



第15図　史跡西部遺構配置図（縄文時代）



第16図　史跡西部遺構配置図（歴史時代）



第17図　史跡西部遺物分布図

これについては、第20次発掘調査報告書でもすでに述べたが、自然に集中したものではなく人為的に投げ入れられたものと考えられる。今年度の調査区であるG5区では遺物の分布は希薄であった。このことからも、縄文時代から平安時代にかけての人々は、G4区とG5区のあいだに走る沢を境とし、そこから南西端に足を踏み入れることは稀だったと考えられる。

2．柱穴列について

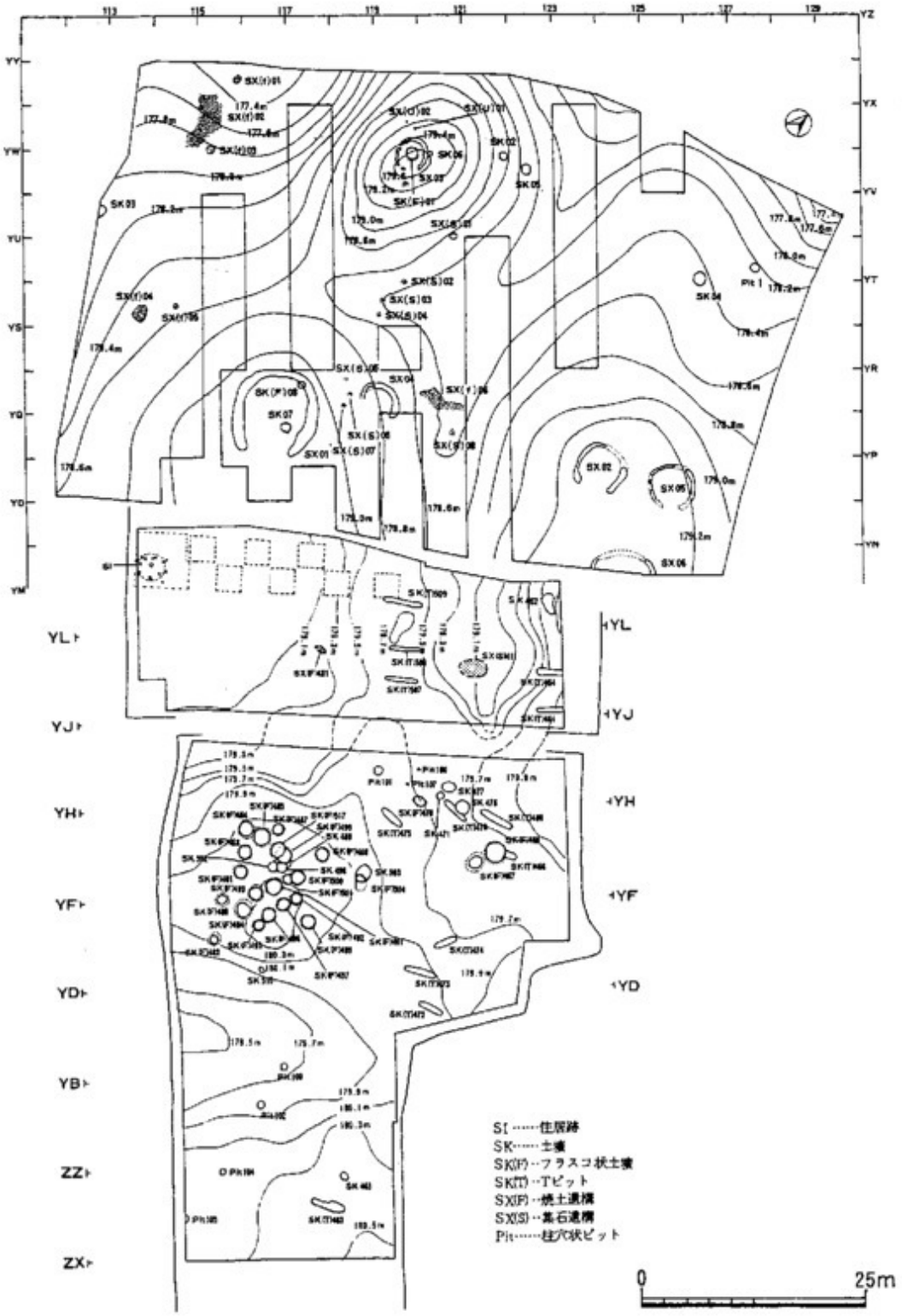
昨年度第20次発掘調査（G_4区）において、調査区北東部から南部で径90～130cm、深さ80～142cmという大型の柱穴状ピットが直線状に６個確認され、本調査区であるG_5区に延びる可能性が考えられたため、今年度、調査目的のひとつに柱穴列の範囲の確認が含まれることとなった。調査の結果、今年度G_5区において大型の柱穴状ピットは確認されず、柱穴列は本調査区まで延びない可能性が高い。新たな資料の増加が見られないため、柱穴列の用途や性格については推測の域を出ないが、他遺跡の資料も含め、考察することとする。

(1) 大湯環状列石内の柱穴列（第18～19図）

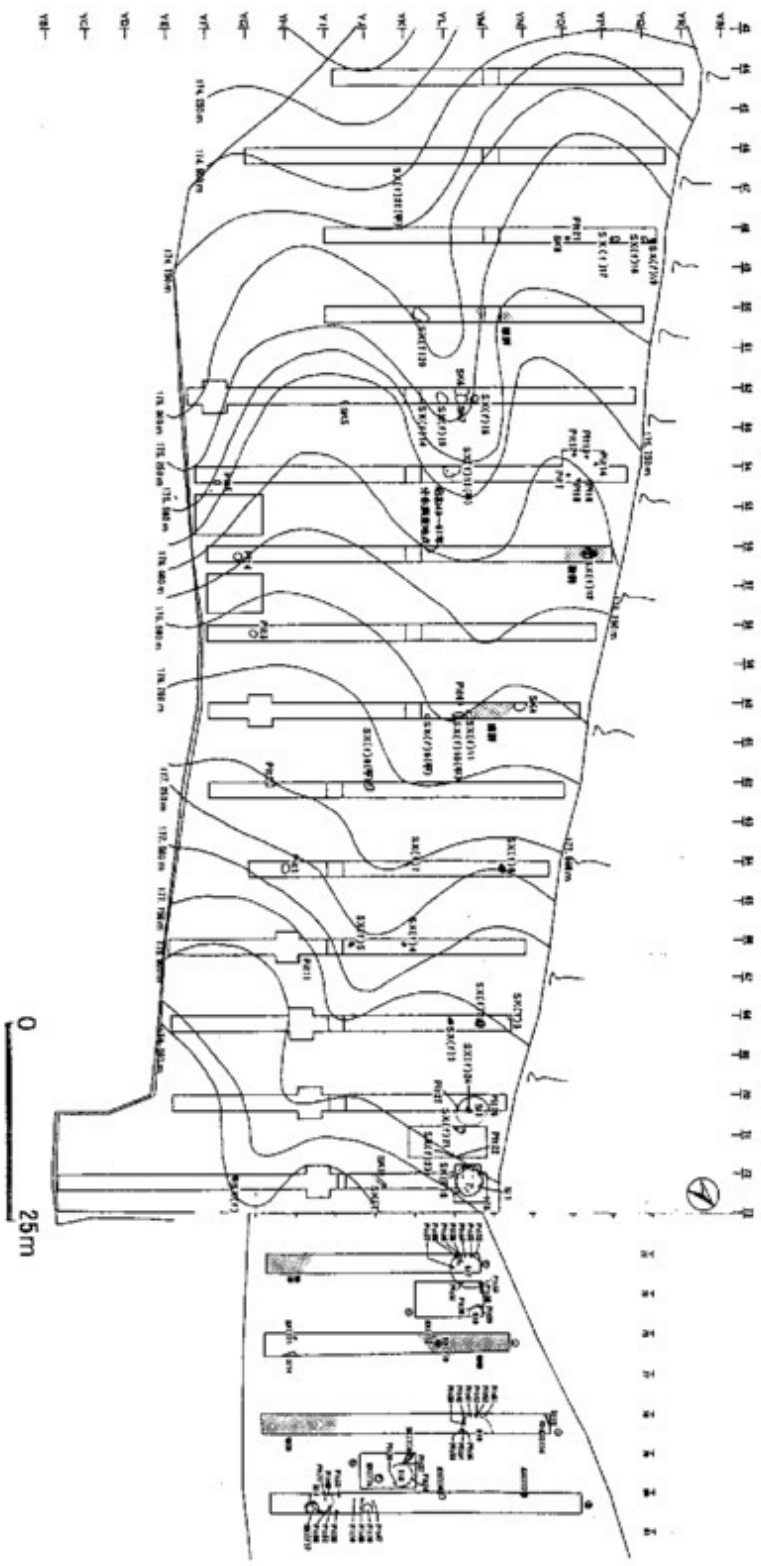
大湯環状列石のこれまでの発掘調査で柱穴列が確認されたのは、第７次（F_2区）と第20次（G_4区）である。

第７次調査（F_2区）で確認された柱穴列は、４本で構成されており、柱穴間は、Pit103－102間が5.00m、Pit102－104間が8.65m、Pit104－105間が6.8mを測る。柱穴列を構成する柱穴状ピットの規模は、径82cm～107cm、深さ88cm～122cmを測る。また、この柱穴列から約35m北に位置するPit101も同様の規模であることから、柱穴列の一部である可能性がある。さらに、周辺の調査区をみると、F_2区の北側の調査区にあたるF_5区の調査区北部で、径95cm、深さ100cmを測る柱穴状ピットが確認されている。F_2区で確認された柱穴列が延びる方向とはやや異なるが、規模などからみて、この柱穴状ピットもF_2区から延びる柱穴列の一部である可能性が考えられる。ピットは、F_2区のPit101から約69m北に位置する。柱穴列の南側については、未調査区域のため不明である。

第20次調査（G_4区）で確認された柱穴列は、６本で構成されており、柱穴間は、Pit11－１－２間は約11m、Pit３－４－５間は約10mを測る。柱穴列を構成する柱穴状ピットの規模は、径90～130cm、深さ80（推定値）～142cmを測る。Pit11－１－２の３本とPit３－４－５の３本の間に18.75mの間隔があることから、６本の柱穴状ピットは３本をひとつの単位として構成されていた可能性が考えられる。また、北東側の隣接区であるD_5区の中央部に位置するPit18は、径116cm、深さ179cm（推定値）を測り、G_4区の柱穴列の延長線上に位置していることから、同じ柱穴列の一部である可能性がある。なお、前述のとおり、今年度の調査によってG_4区の



第18図　F₂区・F₅区遺構配置図



第19図　D.区・G.区遺構配置図

柱穴列は南西側へ広がらない可能性が高い。しかし、トレンチ調査という限られた調査のため、未掘区域に位置している可能性も考慮に入れる必要があることを付け加える。

大湯環状列石で確認された２つの柱穴列は、規模という点では共通しているといえる。しかし、列の延びる方向は、F_2区はNW－SEラインであり、G_4区はNE－SWラインである。柱穴間の距離にも共通点は見出せず、２つの例から柱穴列の用途や性格を導き出すことは困難である。以下、他遺跡における柱穴列の検出状況などから考察を行いたい。

(2) 他遺跡検出の柱穴列（第20図）

他の遺跡における縄文時代の柱穴列の報告例は、秋田県森吉町白坂遺跡、岩手県岩手町秋浦Ⅱ遺跡などがある。

①白坂遺跡

調査区の東部で５列確認されている。(SA25、SA26、SA34、SA35、SA36)
それぞれの柱穴列を構成する柱穴の本数は、３本～12本以上であるが、５列のうち３列は３、４本で構成されている。５列の柱穴列はそれぞれが平行になるように構築されており、場所によっては三重になっているところも見られる。柱穴列を構成する柱穴の規模は、径15～30cmで、深さは15cmほどのものが多い。各柱穴間の距離は、1.0m～4.5mである。

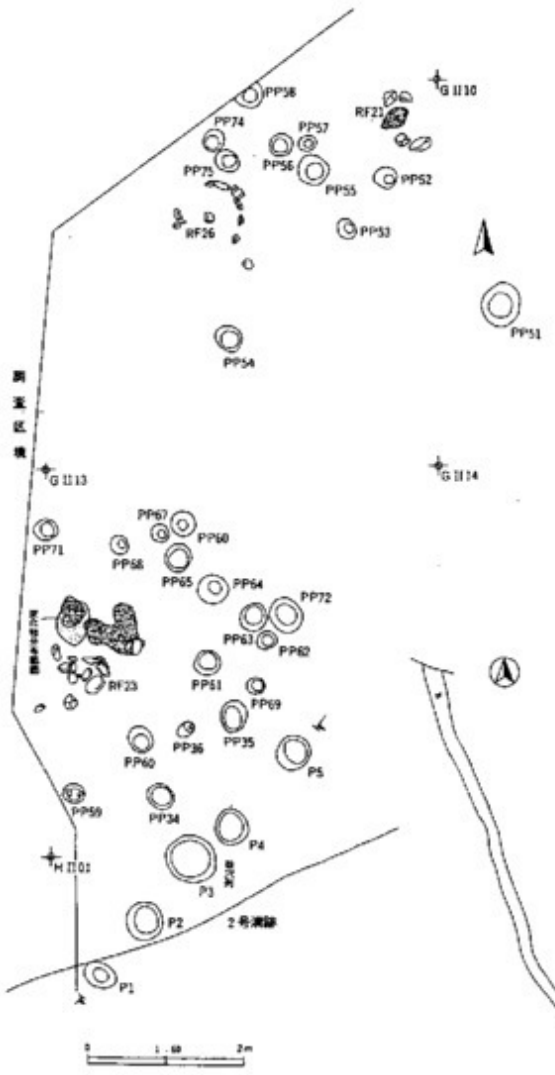
これらの柱穴列について、機能については区画施設であるとしつつも、施設の性格については結論を留保している。また、柱穴列が構築された時代については縄文時代晩期としている。

②秋浦Ⅱ遺跡

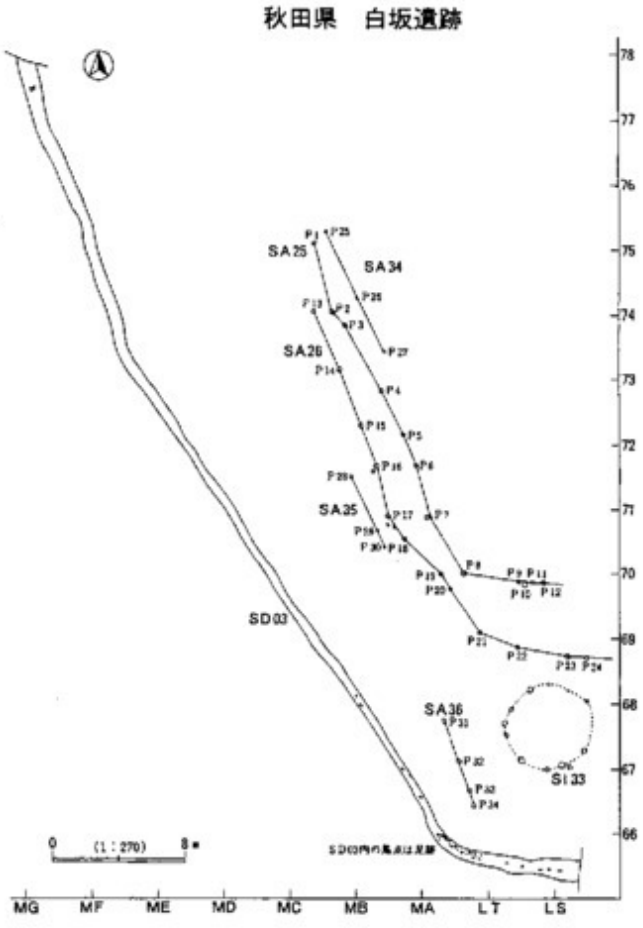
調査区の中央で確認されている。P01－P02－P03－P04－P05の５本の柱穴で構成され、径は40～60cmを測る。各柱穴間の距離は、0.7m～1.3mである。

柱穴列が構築された時代については縄文時代中期であるとしている。

他の遺跡において検出された柱穴列は、構成する柱穴の規模、各柱穴間の距離ともに大湯環状列石で検出された柱穴列とは異なっている。このことは、単なる規模の問題ではなく、機能や性格にも影響するものと考えられる。当然のことながら、構築された地形や他の遺構との関連を考慮する必要があるものの、柱穴列を構成する各柱穴間の距離が１～２mである場合、区画のための施設や追い込み猟のための施設の可能性が考えられる。しかし、各柱穴間が10mにもおよぶ場合、間隔が狭いことによって成り立つ追い込み猟の施設は考えにくくなる。



岩手県　秋浦Ⅱ遺跡



秋田県　白坂遺跡

※図は報告書より転載

第20図　秋浦Ⅱ遺跡・白坂遺跡検出の柱穴列

ここで，再び大湯環状列石で検出された柱穴列について検討してみたい。柱穴列を構成する各柱穴間の距離は5～11mである。F_2区の柱穴列，G_4区の柱穴列ともに周辺部からはTピットが検出されていることから，追い込み猟との関連も考えられるが，柱穴列を構成する各柱穴の間隔が広く，間隔を埋める支柱などの存在も確認されていない。

次に，区画としての機能について検討する。区画という観点からみると，大湯環状列石で確認された2つの柱穴列には共通点を見つけることができる。F_2区において，柱穴列をはさんで西側には土坑やフラスコ状土坑が集中する。東側にはわずかに土坑が混じるものの，Tピットが構築されている。同様に，G_4区においては柱穴列の南東側にはTピットが構築されている。柱穴列の北西側は竪穴住居が構築され，焼土遺構など生活の痕跡といえる遺構が構築されている。大湯環状列石そのものが日常生活とマツリの場を区画しているようにも考えられることから，柱穴列が区画のための施設である可能性も考えられる。

今回，他遺跡事例について十分な資料が得られず，各々の分析も十分に行えたとはいえない。平成17年度以降，発掘調査は史跡北東部に移るが，史跡北東部においても同様の遺構が検出される可能性が考えられることから，機能・性格の解明に向けて注目していきたい。

第Ⅴ章　調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯字万座、野中堂、一本木後に所在し、万座、野中堂の２つの環状列石を中心とする大規模な「マツリと祈りの場」として縄文時代後期前葉から中葉にかけてつくられた遺跡である。

今年度は、史跡南西側での住居跡の有無、第20次調査で確認された柱穴列の広がりの確認を行うとともに、史跡南西部における遺構、遺物の分布状況を確認することを目的とし調査を行った。

なお、今年度第21次発掘調査をもって、万座環状列石周辺から台地の西側縁辺部までの調査をほぼ終了したこととなる。

調査の結果、G_5区で確認された遺構は焼土遺構５基、土坑４基、柱穴状ピット３個、溝状遺構１条、礫群である。

焼土遺構は、調査区内に点在し、小規模である。焼土層も薄いため、屋外での焚き火の跡ではないかと推測される。

柱穴状ピットは、調査区内に点在していた。しかしながら、第20次調査で検出された柱穴列の一部となるような大規模な柱穴状ピットは検出されなかった。このことから、第20次調査で確認された柱穴列は本調査区まで延びない可能性が高いといえる。また、その機能・性格については、第Ⅳ章でも述べたが、追い込み猟のための施設である可能性、生活域や狩猟域などの空間を区分するための施設である可能性が考えられる。

溝状遺構は調査区北部において1条確認された。遺構直上に十和田a火山灰が堆積していることから、平安時代の遺構と考えられる。同様の溝状遺構は、本調査区の隣接区であるG_3区においても３箇所で確認されており、これらと同一の溝状遺構である可能性がある。

今年度の調査区付近である史跡南西部には遺構・遺物はほとんど検出されず、縄文時代から平安時代を通じて、この区域が使用されることは稀だったことが判明した。また、今年度の調査により、南西側に関しては、遺跡の範囲が現指定区域外におよばないことも確認されたと考えられる。

今年度をもって万座環状列石側の発掘調査はほぼ終了し、来年度から一本木後口配石遺構、野中堂環状列石側の調査に入ることとなるが、史跡内の調査は当然のことながら、史跡外の調査を行うことによって環状列石を作った人々の集落を特定していきたいと思う。

参 考 文 献

秋田県鹿角市教育委員会　「大湯環状列石（5）」鹿角市文化調査資料35　1989年

秋田県鹿角市教育委員会　「大湯環状列石（7）」鹿角市文化調査資料42　1991年

秋田県鹿角市教育委員会　「大湯環状列石（14）」鹿角市文化調査資料61　1998年

秋田県鹿角市教育委員会　「大湯環状列石（19）」鹿角市文化調査資料72　2003年

秋田県鹿角市教育委員会　「大湯環状列石（20）」鹿角市文化調査資料74　2004年

秋田県教育委員会　「白坂遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第244集　1994年

岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター　「秋浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第347集　2000年

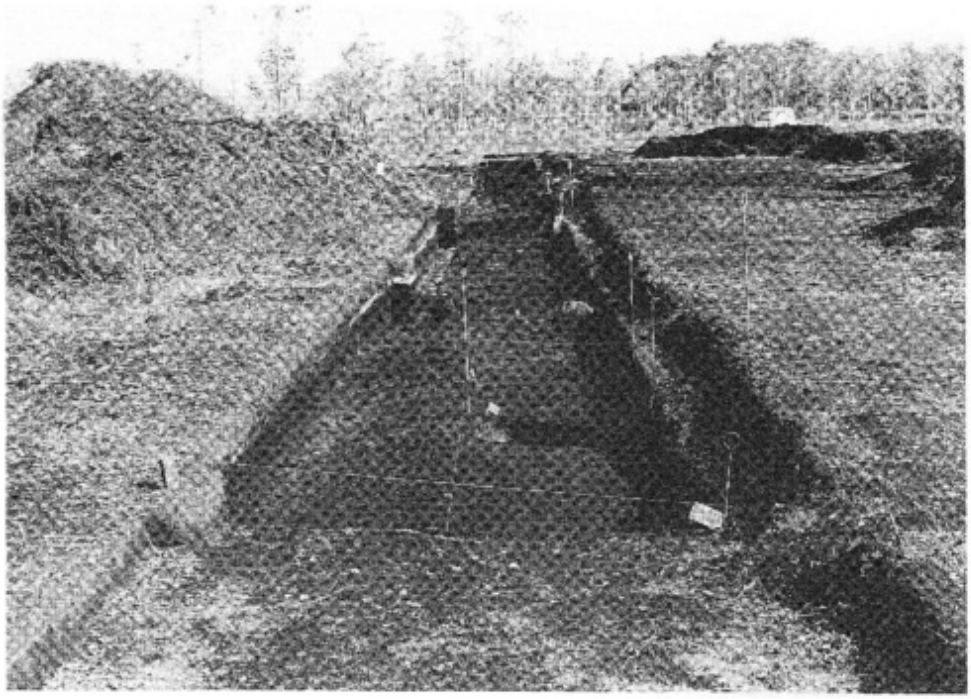
秋田市教育委員会　「上新城中学校遺跡」秋田市教育委員会　1992年

報告書抄録

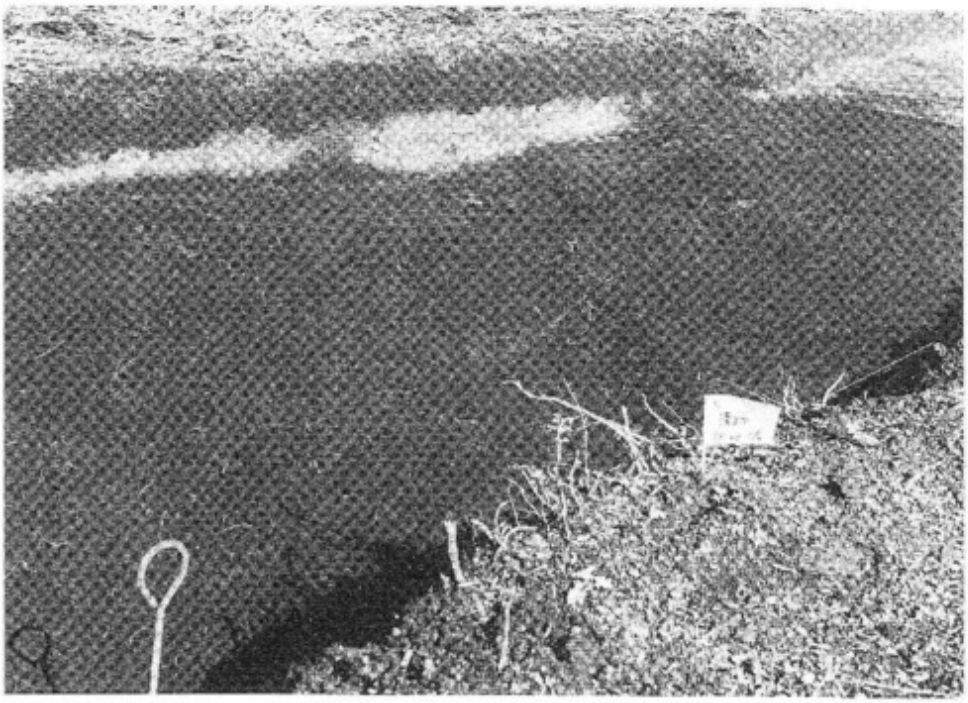
ふりがな	とくべつしせきおおゆかんじょうれっせきはっくつちょうさほうこくしょ (21)
書名	特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書 (21)
副書名	
巻次	
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料
シリーズ番号	78
編著者名	鹿角市教育委員会 (生涯学習課)
編集機関	鹿角市教育委員会 (生涯学習課)
所在地	〒018-5292　秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
発行年月日	西暦2005年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市 十和田大湯字 万座字野中堂 字一本木後口	05209	123	40度 16分 20秒	140度 48分 49秒	2004. 10.5 ～ 2004.12.16	770㎡	史跡環境整備事業に伴う万座環状列石南西側台地縁辺部の遺構分布、地形の把握

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
特別史跡 大湯環状列石	環状列石	縄文時代後期	焼土遺構 土坑 柱穴状ピット	縄文土器 (後期) 石器	環状列石を中心に広がるマツリと祈りの場 平成10年度から14年度に第Ⅰ期環境整備事業を実施 平成15年度からは第Ⅱ期環境整備事業がスタート

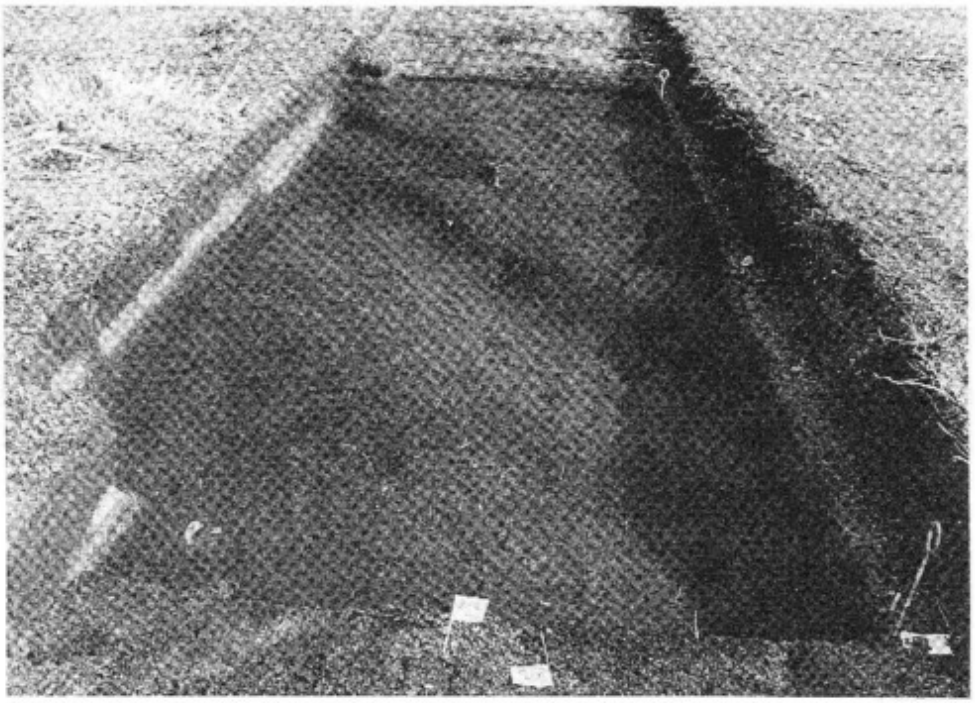


Aトレンチ全景　SW→NE

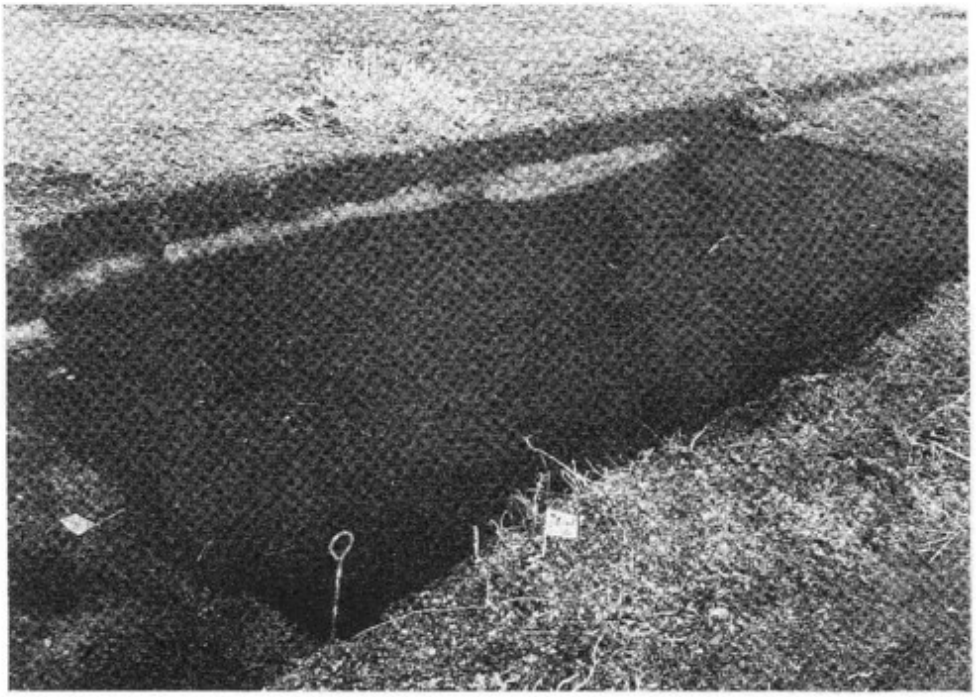


溝状遺構(1)

PL3　Aトレンチ全景・溝状遺構

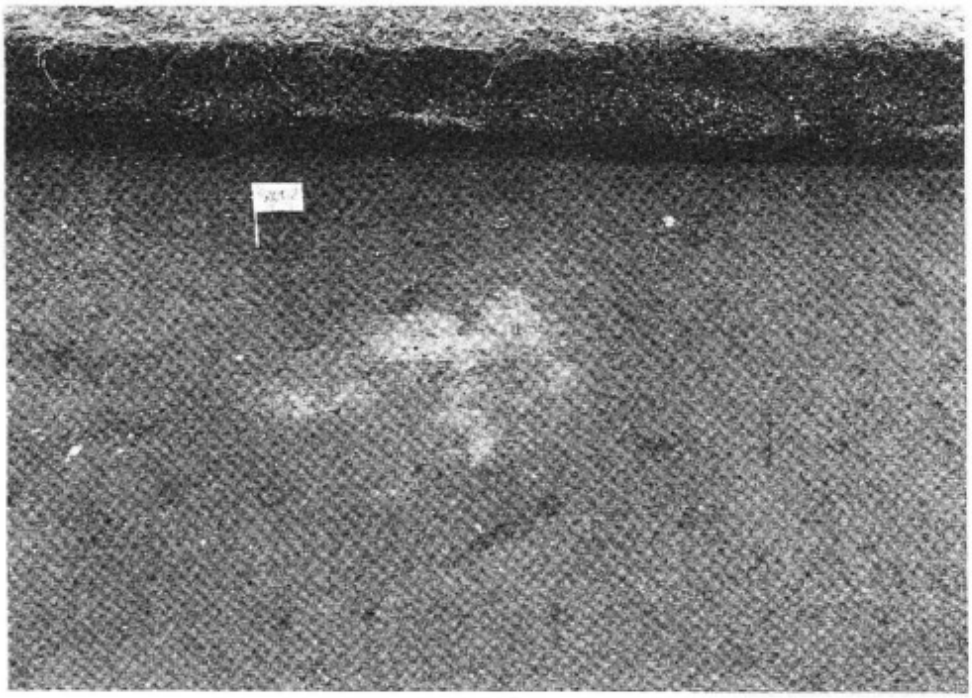


溝状遺構(2)

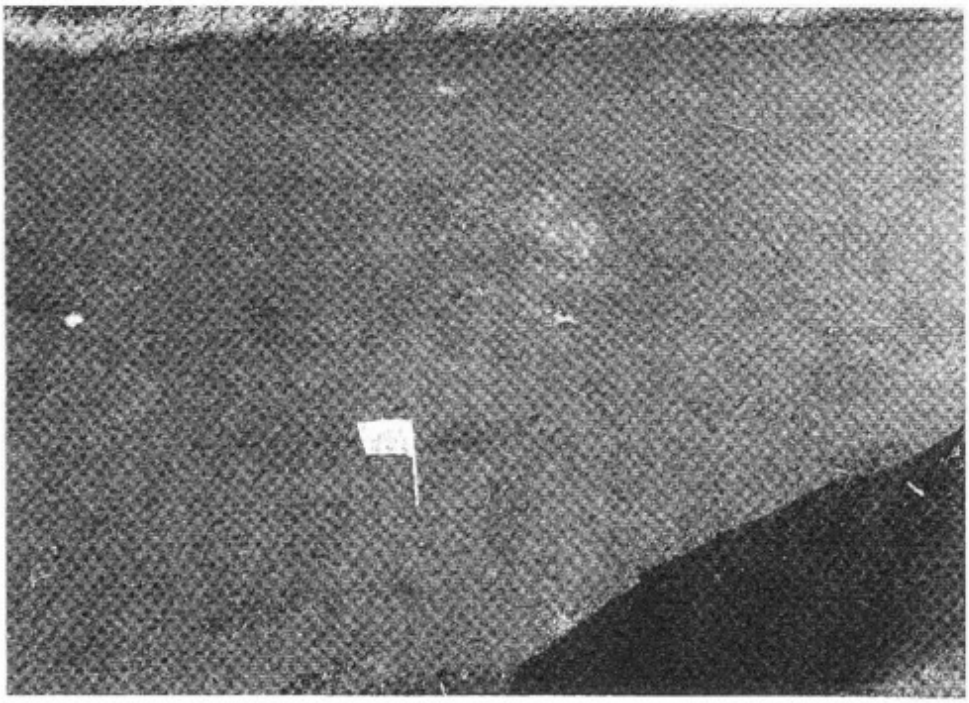


溝状遺構(3)

PL.4　溝　状　遺　構

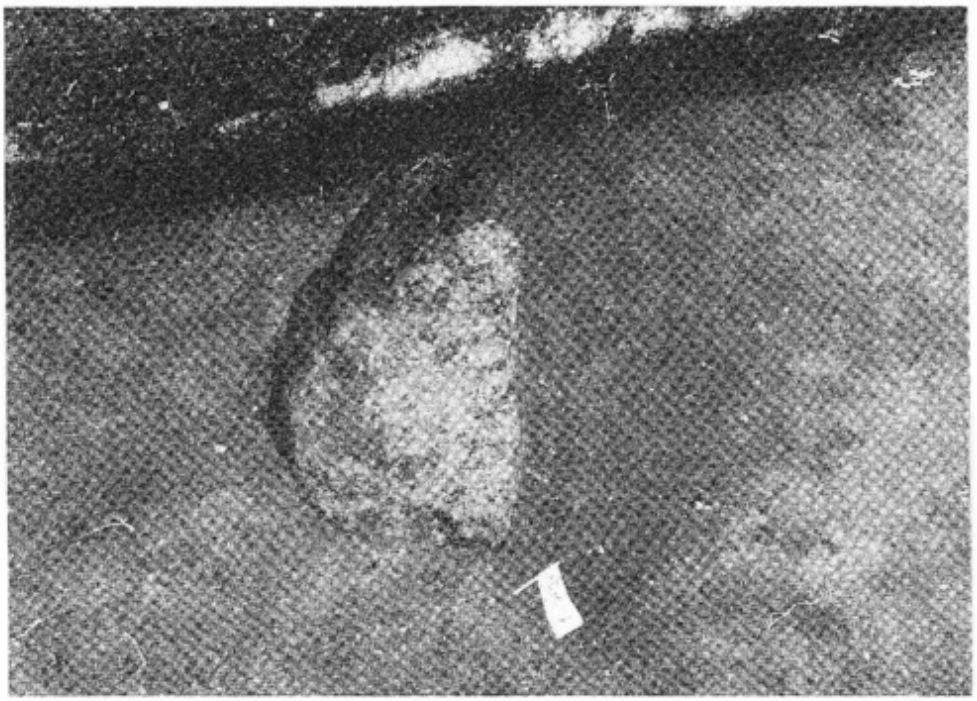


第2号　焼土遺構

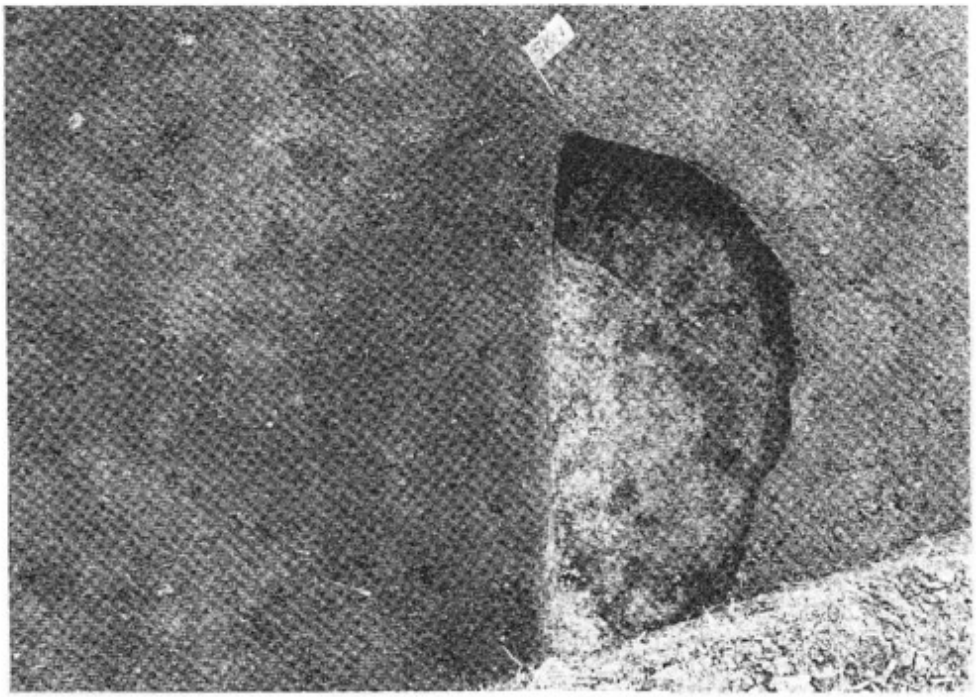


第5号　焼土遺構

PL5　焼　土　遺　構

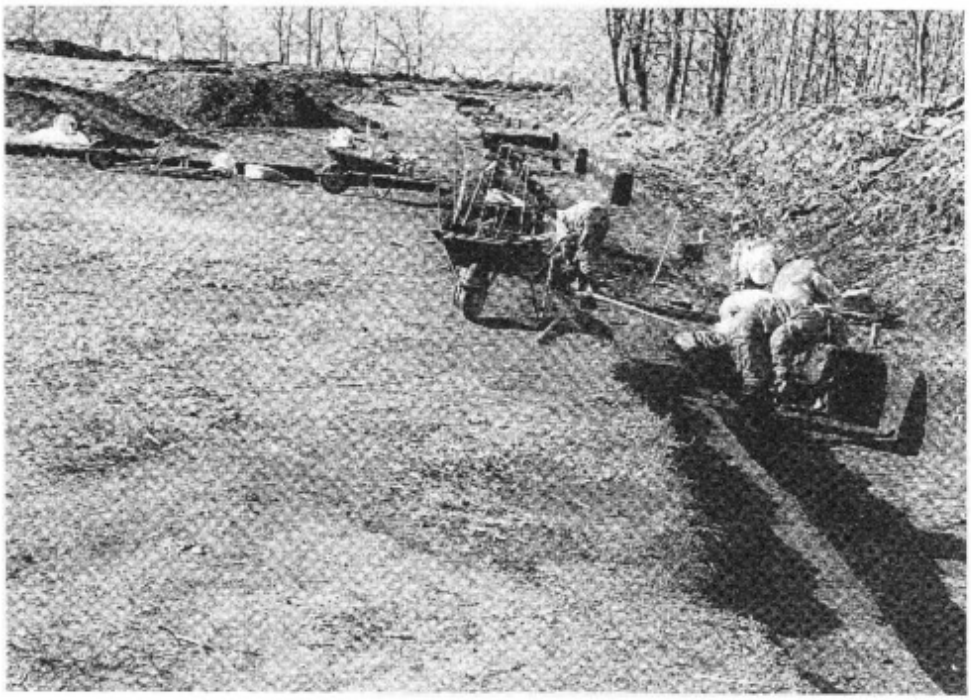


第1号　土　　坑(1)



第1号　土　　坑(2)

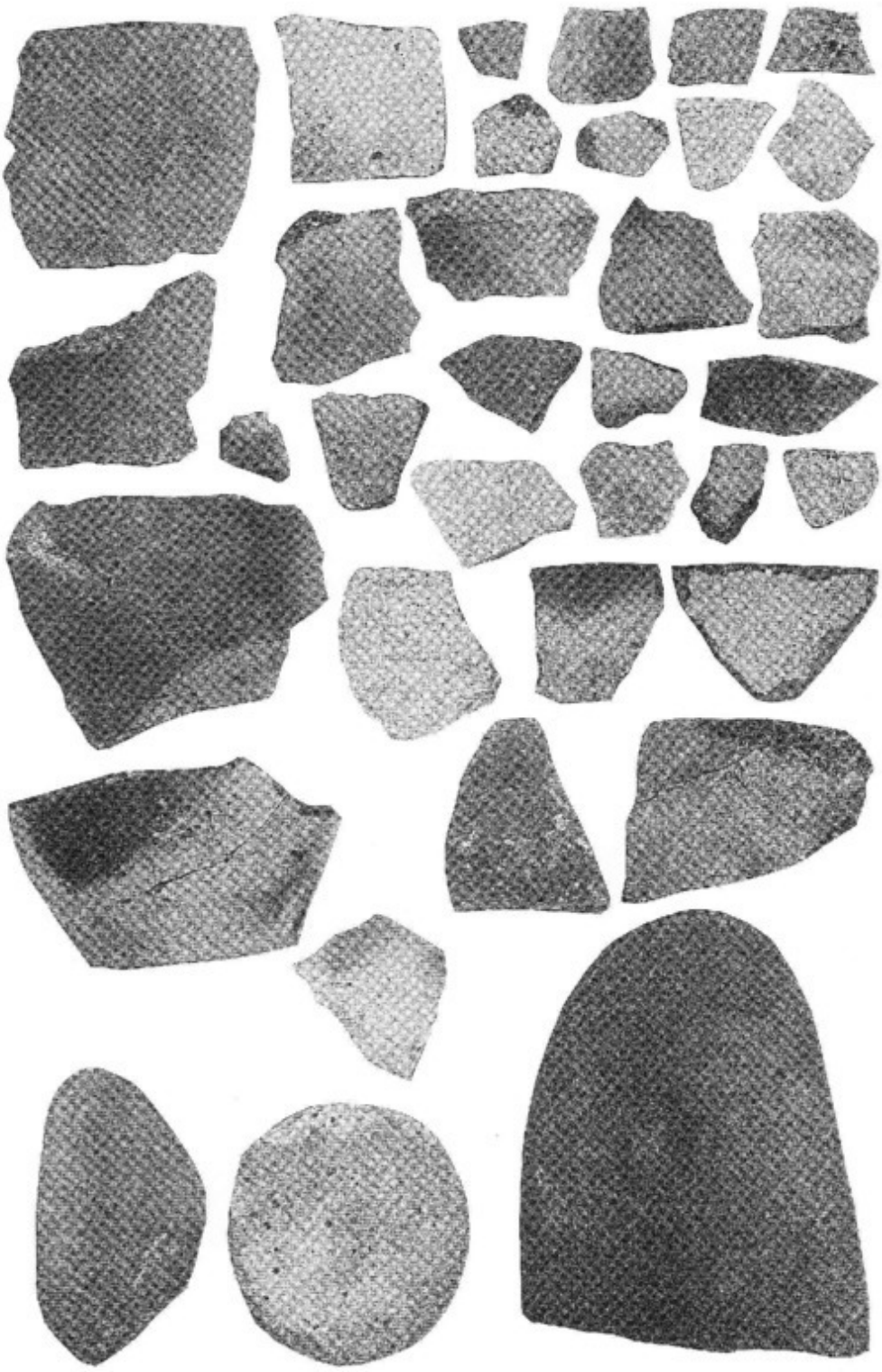
PL6　土　　坑



調 査 風 景

調査区から見た毛馬内地区

PL7　調　査　風　景



PL8　遺構外出土遺物

鹿角市文化財調査資料78

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（21）

発行年月日　平成17年３月31日
発　行　者　鹿角市教育委員会
郵便番号 018－5292
秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
電　話　0186－30－0294
（生涯学習課文化財班）
印　刷　所　㈲大館孔版社
郵便番号 017－0042
秋田県大館市字観音堂316－1